

---

# ロマンス・オブ・ルイズ

ヘリコプター卑弥呼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロマンス・オブ・ルイズ

### 【Nコード】

N8372S

### 【作者名】

ヘリコプター卑弥呼

### 【あらすじ】

バレンヌ帝国最終皇帝ジェラルド二世は、世界を脅かす宿敵七英雄との戦いに決着を着け、世界に平和をもたらした。その後、自らは退位して帝国を共和制に移行させた彼は、世界中の監視を兼ねて旅していた。しかし、突如現れた光に吸い込まれ……

## 第一話 元皇帝と令嬢

その人は、世界を救った英雄だった。

世界を平和的に統一した偉大な帝国があった。その名をバレンヌ帝国と言う。

その4000年にも及ぶ長大な歴史の半分以上は、人類共通にして最大の脅威である魔物達との、夥しい屍山血河を築く闘争をもって紡がれていた。

数多の勇士達が、同胞を守るために剣を振るい術を操って戦い、そして斃れる。その遺志を継いだ新たな勇士達が立ち上がる。幾百幾千度、それが繰り返されていた。

そして、いつまでも続くと思われたその血塗られた円環は、ある人物の出現によって、終りを迎えた。

バレンヌ帝国最終皇帝ジェラルド二世。帝国中興の祖と称えられる賢帝ジェラルド一世の血を引く者にして、傑物揃いの歴代皇帝の中でも群を抜く巨大な才能の持ち主。

歴代皇帝が連綿と引き継いできた、全ての武技と術法をなみなみと注ぎ込まれた空前絶後の大器は、数多の有能な臣下を失いながらも、宿敵“七英雄”を打ち滅ぼし、終に人類に平和をもたらしたのだった。

光溢れる穏やかな世界を取り戻した後、人類史上最高の英雄は、

自らの手で帝国の宿命ばかりか、誰もが永遠とさえ思っていたその歴史にも幕を下ろした。

『自分が退位する日をもって帝国は終焉する。バレン又は共和制国家として生まれ変わる』

世を救った強さのみならず、治世においても民を安んじる名君として、民衆から絶大な人気を誇っていた皇帝の、青天の霹靂と言わべき言葉に、大臣から国民まで皆動揺した。唯一の例外は、帝国宰相にして史上最高の術士、そして彼の片腕であり無二の親友のコウメイ。

帝国の頭脳と称えられた聡明さと、皇帝とは誰より深い付き合いを何年も続けてきた気心によつて、皇帝が他人に一度も漏らしたことのない密かな考えに彼は勘付いていた。だから、彼だけは『ご随意に』の一言で淡々と応じることが出来たのだった。

それからの一年、皇帝と宰相を中心に、帝国を共和制に移行させる諸々の制度改革の叩き台が作成され、次の一年の突貫作業でそれらの全てが完成、法施行された。

未知の、されど前途洋々たる新たなる世界へ船出した、愛すべき国と民。それを見届けると、初代大統領となったコウメイに後事を託して、ジェラルドは帝都アバロンを去って行った。

それからの彼はと言うと、アバロンから離れて世界中を物見遊山しながら、異状はないか監視する旅を続けていた。大きな町から小さな集落まで巡り、ステップの遊牧民ノーマッドや、寒冷地帯のサイゴ族、砂漠の民達と交歓し、そして東の果てで独自の風習文化を

持つヤウダに着いた時には、軽く1年を過ぎていた。

皇帝在任中は多忙で足を運んだことがなく、伝え聞くだけだった極東の文物は、彼には何もかもが非常に目新しく、大いに知的好奇心をくすぐられた。風土や飲食物も水に合ったらしく、彼はここに逗留し続け、そしてまた次の年を迎える。

ある晴れた日の午後、彼は居候先の家主に頼まれた屋根の修理を終えたところだった。二階の屋根程度は階段を使ってもないので、彼は地面に飛び降りた。

その先に、突然楕円形の光が現れ、彼は重力の導くままにその中に足から吸い込まれる。全身を電撃が走った瞬間、魔物と戦った際喰らったそれを思い出し、そこで彼の意識は途絶えた。

目を覚ますと、見慣れたヤウダの町ではなかった。

草原。それもどこまでも続いているかのような。そして、青空に浮かぶ千切れ雲と、それら全てを輝かせる太陽。

人もいる。若い女の子だ。桃色がかったブロンドが、水面のように揺らいで陽光を反射している。顔立ちは幾分幼げではあるが、すこぶる美しい。肌も真っ白で、太陽の下にいるのもあって、眩しいくらい。彼がこれまで見た中でも屈指の美少女だ。

そんな彼女は、戸惑った表情で見つめている。ジェラルルは、周囲に注意を払いながら徐に立ち上がるうとした。

「あんだ、誰？」

初対面だから、当然の質問。その声も鈴が鳴るようで可愛い。彼が立ちあがると、少女が小柄な部類に入ることが分かった。成人男性平均より多少高い彼の身長からすると、軽く頭一つは見下ろす形になる。

「私はジェラルル・ジャン・バティスト・デュードネと言います。ここはどこですか？　そして貴女は？」

「ここはトリステイン魔法学院の敷地外にある草原。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン魔法学院の二年生よ」

ルイズと言うのは、彼の故国バレンヌではさして珍しくない名前だ。だが、トリステインという名詞は聞き覚えがない。世界帝国バレンヌの皇帝だった彼が知らない地名は無いものと思っていたのだが、まだ踏破されていない場所があったのだろうか。しかし、彼女や、距離を置いて彼等を囲む配置の人垣の服装を見ると、白いシャツに黒マントで靴も結構質の良さげなものを履いている。

それなりの経済力がある若者達が数百人いるような共同体に、ジェラルルの知らない地名。何か変である。果たしてここは、彼の住む世界なのだろうか。

「少しものを尋ねますが、バレンヌ帝国はご存知ですか？」

三歳児にするような質問である。ほんの二、三年前まで人間世界を統一していた大帝国の名前を青少年に尋ねるなど、馬鹿にしているのかと怒らせても仕方がないくらい。

だが、どちらの場合の返答も、ジェラルルは想定済みであった。だから、

「知らないわ。何それ？」

訝しげに答える彼女の前で、動揺を顕にすることはなかった。彼のいた世界には、古代の民が作った次元転移装置が実在する。だから、自分が別次元に飛ばされたかもという思考に、彼は比較的容易に行きつくことが出来たのだった。

「別世界に転移したか。原因は 最後に見たあの時の光か？ としても、例の装置にも因らずに次元転移するとはどういうことだろうか？」

形の良い顎に親指と人差し指を当てて、彼は呟いた。ある程度は自分の知る範疇に近い事象であったこと、そして幾度も修羅場を潜り抜けてきた経験により、彼の判断は迅速でかつ精神状態も比較的平静であった。

「ねえ、あんた何者なの？ なんで、使い魔召喚の儀式で人間が召喚されてくるのよ？ ひょっとして人間型の魔物？」

酷い言われようだ。生まれて初めて魔物扱いされ、ジェラルルはついぷつと吹き出してしまった。人間でありながら魔物とつるんで人に害為す外道は彼の世界にいたが、こちらの世界ではどうなのだろうか。

何分未知予想外の体験で不安はないではないが、意識を切り替えてまずは情報を集めることにしよう。彼は腹を据えた。

「私のような魔物がこちらの世界にはいるのですか？ ヴアンパイアとか？」

「ん、えーと、そういうことじゃなくて、私が使い魔を召喚した筈なのに、なんで人間のアんたが召喚されたかってこと。どう考えて

もおかしいじゃない」

頬を赤らめる少女は、困惑しながら意を伝えた。怒気とまでいかなくても、若干苛立ちが表情からも声色からも窺がえた。

彼女の述べた主旨からすると、魔物を呼び出そうとしたものの望まずして自分が呼び出されたのだな、とジェラルは理解する。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

誰かの声を皮切りに、ルイズ達を遠巻きに囲む人垣に、爆笑が波濤のように広がっていく。

「ちよ、ちよつと間違っただけよ！」

ルイズは人垣のある方向に向けて、鈴の鳴るように品のいい声質で怒鳴った。

「ミスタ・コルベール！」

その方向の人垣が割れ、頭頂部から半分ほど禿げ上がった中年の男性が姿を現した。大きな木の杖を手にし、肩から下の全てを隠す黒いローブを纏った男性は、声を荒げる女生徒に対して落ち着いた声で返す。

「なんだね、ミス・ヴァリエール」

「あの！ もう一回召喚させてください！」

黒いローブのコルベールは、首を横に振る。



「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」  
「どうしてですか！」

必死になつて懇願するルイズに、コルベールは淡々と諭す。

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。召喚された『使い魔』によつて、今後の属性を固定し、その後専門課程へと進むんだ。春の使い魔召喚は神聖なる儀式、好むと好まざるに関わらず、彼を使い魔にするしかない」

「そ、そんな……」

肩を落とすルイズ。その傍らで聞いていたジェラールも、状況を大体呑み込めた。

「さて、では儀式を続けなさい」

「えっ！？ 彼とっ！？」

「そうだ。早く。次の授業が始まってしまうじゃないか。君は召喚にどれだけ時間を掛けたと思つているんだね？ 何回も何回も失敗して、やっと呼び出せたんだ。いいから早く契約したまえ」

教師の方向を向いた姿勢から、ちらりとジェラールを見るルイズ。その顔は、先程までにもまして真つ赤だった。その視線を受け止めたジェラールは、彼が会う人全てにそうするように、優雅な微笑を返す。すると、ルイズの方から視線を外して地面に落してしまふ。

「具合でも悪いんですか？」

心配して近寄ろうとする彼に、ルイズは細っこい両腕を突き出しながら両の掌をぱたぱたと振つてみせた。

「何でもない、大丈夫だから！　ちよつと心の準備があれなだけで！」

相手の落ち着きのない様子に、腑に落ちないながらも歩みを止めたジェラルル。彼と向かい合う形のルイズは、下を向いたまま胸に手を当ててすーはーすーはーと深い呼吸を繰り返す。

「大丈夫、大丈夫よ、私。相手は人間だけど、結構美形だし、優しそうだし」

ぶつぶつと呟きながら、呼吸はどうか治まってきたものの、未だ心臓はばくばくいつている。見上げる相手は、服装こそ安っぽいシャツに綿ズボンといった平民そのものだが、本人はまるで絵画の中から出てきたような、彫りの深い端正な黒髪美男子。

真つ直ぐな眉毛と真一文字の唇は意志の強さを、通った鼻筋は伶俐さを、胸まである幾条にも跳ねる癖つ毛の髪は活気を表すかのようだが、そして何より印象的なのは長い睫毛に彩られた妙に深い色合いの双眸。見ていると、吸い込まれそうになる不思議な眼力がある。

ただ美しいだけでなく、豪華絢爛と言うべき威厳と気品がやたらと感じられる雰囲気の持ち主であり、見れば見るほど形には現れないそれらが泉のように滾々と溢れ出て来るかのように感じられる。平民の服を着せておくのが勿体ないくらいである。

そんな男性と、ルイズはたった今からキスをしなければならなくなった。未体験のおぼこな彼女が、赤面してまごつくのも至極当然のことなのだ。

「ジェラルル、目を瞑って。そして少ししゃがんで」

「こうですか」

彼女が危害を加えようとしている訳ではないのは、ここまでの言動と目を見れば何となく分かる。歴戦の勇士ジェラルは、いざとなれば何とかする自信もあったので、彼女の言う通りにしてみた。

ルイズも目を閉じると小さな杖をその前で振って、呪文の詠唱を開始した。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そして、杖をジェラルの額に置くと、ルイズの紅潮した顔が彼の顔に近付いていく。ルイズの良い匂いが強まるのを感じて薄眼を開いたジェラルは、彼女の美顔が至近距離まで来ているのを見た瞬間、動揺するより早く中腰を解除して背筋を伸ばした。頭一つは低いルイズの顔は、当然のこととして彼の胸板上部に当たり、驚きながら目を開け見上げれば、困ったように見下ろすジェラルの視線があった。

「不意討ちは良くないですね。そういうことを望むなら、事前に相手に話すものでしょう。私と貴女は恋人でも何でもないのだから」  
「なつ、こつ、恋人とかそういうんじゃないやなくて、キスしないと使い魔の契約の儀式が出来ないのっ！ だから、じつとして！」

「ああ、そう言えばさっき、あちらの人と話をしていましたね。春の使い魔召喚の儀式とか。しかし、私が一方的に別世界に転移させられたうえに、勝手に使い魔にされると言うのも、おかしい話ではないですか？」

彼の言葉が引つ掛かり、ルイズは一度黙って考える。別世界から

来たと言っのか。そんなことが有り得るのだろうか。

「ねえ、別世界に転移って、このハルケギニアと違う世界から来たってこと？ そんなことがあるの？」

「私の世界では、遙か昔にそのための装置を開発して別の世界に移動した人達がいたと伝承にあります。私自身、別世界ではないですが、向こうの世界の中で空間転移する装置を使ったことはありません」

やけに眼力が強いことと、理路整然とした彼の話しぶりに、ついルイズは納得してしまう。彼女の常識を超えた話だが、人間が召喚されたこと自体、そもそも常識外れなのだ。常識の枠内で片付けられない話が出て、その可能性も有り得ると考えるべきかも知れないと、彼女は無意識にニュートラルな思考を育みつつあった。

「ん〜……俄かには信じ難いけど、何が起きてても変じゃないって気もしてきたわ……。じ、じゃあ、とりあえず貴方の話を信じる前提で話をするわね。」

ルイズは一度言葉を切り、コホンと可愛らしくも偉そうに咳払いしてから続ける。

「それで、さっきの続きだけど、勝手かも知れないけど仕方ないじゃない。何故だか人間が呼び出されてしまっただけで、それでも私は使い魔にしなきゃならないんだから。それに、貴方も平民なら貴族の私の言うこと聞かなきゃ駄目なのよ」

「と言うと、こちらの世界では、貴族が平民の生殺与奪を握ると言うわけですか？」

静かに聞き返すジェラルルの目と声は、どこか寂しそうなものだった。穏やかなのに、じわりと責められているような気がしたルイズ

ズは、やや押されながらもとりあえずこの世界の当たり前前のルールで反論する。

「全部とは言わないけど、大体はね。でもその代わり、非常時には、貴族は平民を外敵から守る役目があるの」

「なるほど。まあどこの世界でもノーブレス・オブリージは共通ですね。私は望まずして呼ばれた訳ですが、郷に入れば郷に従えという諺もありますし、百歩譲った上で、仮の考え方としてこちらの貴族の権利を理解してもよいでしょう。ですが」

一度言葉を切り、一呼吸置いてからまた続ける彼の言葉は、ルイズを当惑させた。

「今は平民ですが、私はほんの暫く前まで世界を統一した帝国の皇帝でした。そういう経歴の人間でも、貴族に生殺与奪を握られるのでしょうか？」

その言葉にルイズは驚いた。しかし、同時に幾らか納得も出来てしまう。

皇帝と言えば、この世界においては、ルイズ達の国トリスティンの隣国『帝政ゲルマニア』を治める者の称号。ゲルマニア領土はトリスティンよりは十倍近く広大だが、この世界全体から見れば数分の一である。

このジェラルルなる人物は、彼の世界の全領土を治める大帝国の頂点に立つ者だったと言う。服装が質素なので平民と思いついていたが、そう言われると、このあまりに立派過ぎる威厳や気品にも納得がいった。質素な平民の服装では、彼の放つ光輝が全く収まらないのだ。

やんごとなき出自だとすれば、礼をもって応じなければとルイズは認識を改める。しかし、だからと言って、はいそうですかと引き下がることも出来ない。彼女の立場からすれば。

「元皇帝だった方の生殺与奪を握るなんて言えません。でも、私も引けないんです。ここで引いたら、メイジになれないから」

彼の袖を掴む少女の目は真剣だった。このメイジの学校を卒業して、一人前になるうと一生懸命なのだろう。帝国の訓練所で日々鍛錬に励む、新米兵士達の青臭くも鋭気溢れる姿を思い出すと、ジェラルは少し心の中が和らいだ気がした。

「使い魔になるということについて、私に包み隠さず説明出来ますか？ まずはそれを聞いてからです」

是非も無い。ルイズは、こくりと頷くと先程の禿頭の男性教師を呼んで、三者で話をした。無理強いが通用しないと分かると、穏健な教師コルベールは、前例の無いこともあり、学院長と面談した上で対応を決めることとして、生徒達には学院に戻って自習を命じ、自身はルイズ達を連れて学院長室に向かった。

「ふむ、つまり貴殿は異世界から召喚されてきた、その世界の為政者だったと」

学院長のオールド・オスマンは、白く立派な顎鬚を指でしごきながら、テーブルを挟んで異世界の客人と向き合う。

「では、使い魔について全てを説明しましょう。まず、使い魔の仕事で一番重要なのは、契約者を護衛することじゃ。魔法は強力なものほど詠唱に時間が掛かるうえ、その間は無防備になるからのおう。貴殿は、戦闘は得意かな？」

「好みませんが、武技については一番の使い手でした」

「結構。その他の仕事としては、主人と同じものを見聞きすることが出来るようになるので、それを活かしての偵察任務。あと、秘薬の調査に使う触媒を発見してくる探查任務がある」

「それらについては、心得がありません」

「まあ、戦闘が出来るなら大きな問題は無かるう。あとは、使い魔の契約は死ぬまで解除されないこと、使い魔は主人を好意的に思う傾向があるといったところじゃ」

眉一つ動かさずに聞くジェラルルの隣で、ルイズはテーブルを見つめながら考えていた。

使い魔が主人を好意的に思うことがあるとは知らなかった。そりゃあ獰猛な獣が暴れて言うこと聞かないんじゃ、使い魔になるところか危険だからそういう作用があるのは、言われてみれば当たり前前のごとに思える。

しかし、この元皇帝の肩書を持つド派手な美男子が自分に好意を抱くのを想像すると、胸の高鳴りが治まらない。経歴・気品・容姿どれを取っても超の付く一流。しかも、向こうの世界では一番の武人でもあったと言う。国内随一の名門貴族ヴァリエール公爵家の娘である自分のパートナーとしても、問題無いとさえ思えてくる。

「さあ、後は貴殿が決めることじゃ。ミス・ヴァリエールの使い魔になるかどうか」

ルイズは顔を上げて隣人を凝視する。『なる』と言って、と強く念力を込めながら。

「ならないと言えはどつするのですか？」

ルイズは凍り付いた。まさか、嘘、と彼女の中はこの二語だけが交互にリフレインするだけになってしまった。

「どつするも何も無い。わしに出来ることはこれ以上何も無いゆえ、貴殿達二人の問題になりますな」

一見無責任なようで、しかし厳然たる事実をオールド・オスマンは言い放つ。敵でもないが味方でもない、そういう関係になるのだらうとジェラルルは解釈した。

「一晩考えさせてください。それからどつするか決めたいと思います」

黙って頭を振るオールド・オスマンに一礼し、ジェラルル達は席を立った。ルイズは思考が固まったままでぼーっと座っていたので、ジェラルルが肩を揺すってやるとはっと気が付いて立ち上がり、彼に続いて学院長室から退室して行った。



## 第二話 ルイズ、契約出来ず!?

ルイズは気が気ではなかった。

人間を召喚してしまった時にはまた笑いものになると思ったが、聞いてみればその美男子は、元は世界帝国の皇帝陛下とのこと。しかも、向こうの世界では一番の武人だと言う。経歴・気品・容姿の全てにおいて超の付く一流で、さらに武力まで優れているとなれば、トリステインの名門貴族ヴァリエール家令嬢の相手としても申し分ないくらいだ。

彼の言葉を、ルイズは信じ込んでいた。同じ貴人の出ならではの優雅な空気を感じ取ったことや、彼が自分の求める素晴らしい存在であってほしいという願望もあつたのだらう。人間を召喚したという笑いの種にされそうなハンデを、引つ繰り返すくらいの存在であつてほしかったのだ。是非真実であつてほしいと。

そして、使い魔には主人に対して好感度に補正ボーナスが掛かるという素晴らしい情報も得た今、何としても契約を結ばなくてはならない。逃がすには、あまりに巨大過ぎる魚だ。ところが、

「一晩考えてから決める」

との、つれないどころではないお言葉。冗談ではない。契約出来ると出来ないでは、正に天地の差だ。失敗は許されない。

決意を固めたルイズは、夕食は食堂で取らずに自室に二人前持つて来させ、ジェラルと向かい合つてテーブルで食べた。

どうやって契約させるかで頭がいっぱいの彼女は、味も良く分か

らないほどだったが、ジェラールは彼の世界の作法らしい両手を合わせて軽く頭を下げる行動をしてから、淡々と出された食事を平らげ、そしてもう一度同じ行為をした。最初は『頂きます』、最後は『ご馳走様でした』と言葉を添えて。

食事が終わると、食後の白ワインを相手のグラスに注ぎながら、ルイズは話を切り出した。

「使い魔契約のことなんですが、故意でないとは言え貴方をこつちの世界に呼び出してしまつて申し訳ないと思つてます。その上で図々しいと思われるでしょうけど、私と契約してもらえませんか？ 私に出来ることであれば、貴方の望みを叶えるよう努めますから」

ペこりと頭を下げるルイズ。学院の教師と家族、そして彼女が仕えるトリステイン王家の人以外で頭を下げるのは初めてのことだった。向こうのことは分からないが、世界帝国の皇帝なら、一国の大貴族の子女よりも身分は上だろう。その上で、迷惑なお願いをするのだから、いいとこのお嬢様でプライドがとても高い彼女でも、心から頭を下げる事が出来たのだった。

ジェラールはポーカーフフェイスのまま、彼女のグラスに注ぎ返した。そして、自分のグラスを手に取り、そつと彼女に近付けた。

「まずは一献やりましょう」

頭を上げてグラスを取つたルイズは、彼の言葉に応じる。チンとガラスの音が鳴ると、互いにグラスを軽く回して揺らし、フルーティーな芳香と金色を帯びた色合いを楽しみながら咽喉を潤した。

「まるで柑橘の果汁だ。全然酒臭さが無い。20年ばかり寝かせた

ものですね」

「お酒に詳しいんですね」

「世界中を放浪してましたから。私が最後に住んでいた地方の酒は、ワインとは違って独特の甘みや香りがするんですよ。懐に少しだけ入れて持ってたんですが、どうですか？」

部屋の隅に置いていた二合徳利を、ジェラルルは手に取ってテーブルに置いた。その焼き物は、形状といい表面の色合い・光沢といい、彼女が見たことのない種類の容器だった。

「そんな貴重なもの、いいんですか？ もう手に入らな……」

言い掛けて、ルイズは口を噤んだ。自分がやったことを、自分自身の言葉で責めることになる。因果なものである。

ジェラルルは、ここで優しい笑顔を見せながら、徳利の栓をすぽんと抜いた。

「私はこれまで十分に飲みましたから。味わったことのない人にも、この味を知ってもらえたら嬉しいです」

一つだけのおちよこにとぶんと注がれると、白く濁った液体からワインとは異なった発酵臭が彼女の鼻腔を刺激する。慣れない者にはきついくらいの臭いだ。

「じゃあ、頂きます」

小柄な少女が、小さなおちよこの中の濁り酒をくつと飲み干す。おちよこを置いた彼女の可愛い顔が、苦悶のような渋い表情に歪んでいる。

「うつつ、臭っ！ ご馳走様でしたけど、ちょっときつい……」

その様子をにこにこしながら見ているジェラルルに対し、ルイズは酷いと思った。

そんな素敵な笑顔で、レディのこんな恥ずかしい様子を見つめるなんて、意地悪な人だわ。ひよっとして悪戯好きなのかしら。

初めて口にする異世界の酒に、かっと体の芯から温まるのを感じながら、ルイズは彼から日常を奪ってしまったことを改めて実感する。先程まで、何とか言いくるめることばかり考えていた身勝手に余裕の無い自分が恥ずかしくなってしまう。

「ジェラルル様、貴方からこのお酒を飲む楽しみも、そこでの暮らしも奪ってしまったでごめんなさい。本当は、貴方を帰して差し上げなければいけないのだけど、その方法は伝わってないんです」

しおらしく俯いてしまうルイズ。その肩に優しく触れながら、ジェラルルは語り掛けた。

「貴女に悪気は無いことは分かります。それに、私は世界を気ままに回る旅人。いなくなっただころで、誰も困りません。あの世界の政治は、私の友人で最も賢い者がちゃんと務めてくれますから」

「でも、故郷に帰ることだってあるでしょう」

「余程のことがない限り、故郷には帰るまいと決めたのです。共和制を歩み始めた首都に、最後の皇帝を務めた者がいるのは、あまり好ましくないと個人的に思っただので」

「共和制？」

聞き慣れない言葉に首を傾げるルイズに、ジェラルルは説明する。

「こちらの世界では、どの国も王侯貴族が政治をしているんですね」  
「ええ」

「私の世界も数年前まではそうでした。世界を脅かす魔物と戦うためには、組織及びその長に強い統率力・決定力があり、一丸となって国の力を結集出来る形態でなければならなかったから。他に問題点があるうとも」

傾いたグラス内で蜜のようにとろとろと光る液体を、彼はまた一口咽喉へと落とす。

「しかし、魔物の脅威が去った今、政治をする者を国民の自由意思により投票で選び、一定期間ごとに選び直させたり、その者が相応しくないと判断された場合は罷免出来るような政治形態がより良いと思いました。王制は、上に立つ者が愚かだったり暴虐だったりすると、最悪の結果を国民にもたらしますし、それを正すには多くの血が流れやすい。無条件に与えられた王座は澱みやすいものだと、遙か過去の歴史が教えてくれます」

変わった考え方をする方だ、と何千年も続く封建の世で生きるルイズは思った。斬新過ぎる発想だが、それはそれで疑問符も付く。

「でも、これまで政治をしたことのない民衆に、国を運営していくことが出来るのかしら?」

「そこは、私の在位中を支えてくれた名宰相が、共和国でも中心となってやって来てますから、さほど心配していません」

ジェラルルの笑顔がより寛ぎ、楽しさの強まったようにルイズには見える。

「余程優秀な方なんですな」

「ええ。『バレンヌの頭脳』と呼ばれた不世出の天才で、術法に關しても右に出る者の無い実力者でした。私も臣下も、何かある度に真つ先に彼に相談したものです」

ヤウダ名物のどぶろくがもたらした様々な効果により、ルイズの心もすっかりほぐれ、素直な気持ちで彼等は語り合つた。元々酒の弱いルイズは、グラスが進むにつれてへべれけ振りが進行し、ろれつが怪しくなつてきたところで、その晩はお開きとなつた。ジェラルの寢床は、ルイズが使用人に準備させたベッドで、部屋の一角に置かれたそれはふかふかで寢心地の良いものだった。

翌朝、寝起きの悪いルイズは、がらがんする頭に苛まれながら起き出して来た。べろべろになつたまま、寝巻きのネグリジエに着替えずに寝てしまったのだが、かえつて都合が良かった。一人で寝ていた頃のネグリジエは、下に何も着けていない状態なので、ジェラルに見られたら恥ずかしくて一日中赤面ものだったろうから。

「お早うございます」

声のする先には、昨日と変わらぬ様でジェラルが微笑んでいる。窓から差し込む光を浴びて、彼の華やかさが乱反射し、益々磨きが掛かっているように見えた。

「お早うござ、ふあ〜」

きちんとした所を見せたかつたのだが、生理現象は無慈悲にも彼

女の意気込みを砕いてしまったようだ。くすくす笑うジェラルルに、ルイズは急に血圧が上昇して抗議する。

「酷いわ、ジェラルル様ったら！」

「すいません。あまりに可愛らしい欠伸だったもので」

可愛いという言葉について騙されそうになるが、踏み止まったルイズは膨れっ面を維持する。コップに入った水を手渡されると、ルイズはお礼を言っただけをぐくりぐくりと飲み干した。酔いの残る体に、ただの水がひんやりと沁みて実に美味しい。

「二日酔いは大丈夫ですか？」

「まだちよつと辛いですけど、どうにか」

「使用人に部屋に朝食を運ぶよう頼んできましょう。その間に着替えるといいですよ」

彼が部屋を出ると、ルイズは酒臭さの残る服を着替えて、洗濯済みの気持ち良い服に着替える。その後、彼が使用人と一緒に戻ってきたので、昨晚同様に向かい合って朝食を摂った。彼女の体調を慮ってか、フルーツと生野菜に牛乳、クロワッサンといった軽めで新鮮な朝食である。それでも胃が受け付けなかったクロワッサンは、彼に食べてもらった。

その日の放課後、二人は学院長室に行った。一晚経ったので、結果を報告する必要があったので。

「考えは決まりましたかな」

「はい。私は、まだ現時点では彼女と契約しません」

頭から冷水を掛けられた気分だった。少し仲良くなれたと思って

いただけに、ルイズはいつそう衝撃を受け、がくがくと身震いさえ始める。

「現時点では、とは何やら含みのある言葉ですな」

「私は昨日この世界に召喚されたばかりで、彼女にもこの世界にも愛着や大事なものがありません。そんな私が、重大な関係を結ぶ契約を軽々しくするのは、承服しかねるからです。ですから」

言葉を切つて隣を見ると、哀れ少女は真っ青になっている。可哀そうに思えたジェラルルは、すぐに肝心の部分を続けて言い放つた。

「彼女の傍にあつて、果たして私が契約するに足る人物か否か、見極めさせてほしいのです。十分であると判断した時点で、契約を結ぶというのは如何でしょうか？」

「ふむ、仮契約のようなものという訳ですな。しかし、もしその途中で貴殿が姿をくらませたりしたらどうなさるのか？」

「学院長殿に連絡も無しに、いなくなったりはしません。必ず、そういう判定を下しましたと報告してからにします。そこは、私を信じていただく他ありません」

オールド・オスマンは、腕組みをして暫く無言になる。そして、顎鬚を扱き出すと、重々しい口を開いた。

「まあ、そこは信じるとうしましょう。じゃが、仮契約に関しては、例外中の例外と言うことで特別な措置をするにしても、その代わり貴殿の実力を測らせてもらいたいところですね。失礼ながら、大した力も無いのにただ特例だけを求められるということのなきよう」

ジェラルルは、ルイズの様子をちら見だけすると、すかさず交渉相手に反撃した。



「お望みとあれば。そこで、私の力を十分と認めてもらえたなら、彼女を無事進級させていただきたい」

無条件で契約といく程の情はまだ彼女に対し湧かないが、それでも留年させたら可哀そうだというくらいの気持ちはあった。

「欲張りますのう。それならば、少々厳しい試験になるが、それでも構いませんか？」

平静を崩さぬまま、ジェラルルはこくりと頷く。そこで話は終了した。

廊下を並んで歩くルイズの表情は、先程に比べて随分ましになっていた。それでも、心配の色だけは消えていなかった。

「あんなこと言っちゃって大丈夫ですか？ 私、嫌な予感がするんですが」

「私と契約しようという人が信じられないようでは、資質無しと見られても仕方ありませんよ」

かなり辛口の言葉が、小さな胸にぐさりと突き刺さる。またも俯き黙ってしまった彼女に対し、厳し過ぎたかなと思ったジェラルルは本意ではなかったが、溜息一つ付くと仕方なしにフォローを入れた。

「力を見せびらかすのは趣味ではないですし、自分で言うのもおこがましいですが、私に宿る力は、そこらの魔物が何百匹束になろう

がものともしませんよ。大船に乗ったつもりでいてください」

彼を見上げるルイズの顔は、少しぼかんとして間が抜けてもいたが、それでもなお十分に可愛らしかった。

そして、彼の言う力を彼女が目にする機会は、意外なくらい近くまで迫っていたのだった。

### 第三話 ジェラルルの力

翌日の一限目の前、講義室で並んで座るルイズ達に近付く影が一つ。

「お隣、よろしいかしら？」

ジェラルルの隣から掛かった、どこか陽気で軽やかな女性の声。その方を見遣ると、燃えるような赤い癖毛と健康的な褐色の肌、そして教室内でも群を抜くグラマラスな体型が印象的な美女がいた。

「ええ、どうぞ」

断る理由も無いのでそう答えると、女性はにこっと魅惑的な笑顔を浮かべて隣に座った。じっと自分の方を見つめてくるので、ジェラルルも常日頃どおりに穏やかな微笑を浮かべて応じる。

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。貴方の名前をお聞かせ願えるかしら？」

ジェラルルが名乗ろうとしたその数瞬前に、逆側にいるルイズが彼の袖をくいと引っ張ったのでそつちを見ると、彼の耳に小さな声で耳打ちしてきた。

「ジェラルル様、その娘の実家は私の実家と領地が隣同士で、長年に渡って戦争してきた宿敵なんです。お願いですから、どうか私と席を替わって話をしないでほしいんです」

随分と血生臭い因縁話である。人間が一致団結して魔物に当たっ

ていた国の出身としては、人間同士で争う話には悲しく切ないものを感じてしまう。

「貴方達のお家の事情は、この学び舎まで持ち込むべきものなのですか？」

「うつつ」

ひそひそと耳打ちに耳打ちして返される正論。

「そのお話は後から聞かせてもらうことにして、互いに自己紹介するくらいは当然の礼節ではありませんか？ それと、他者の前で様付けはしない方がいいでしょう。世間的には貴女の使い魔として見られるのなら、二人きりの時以外は呼び捨てにしておいた方が余計な勘繰りを受けにくいと思います」

ひそひそ話し終了。呼び捨てなんて親密な関係みたくで恥ずかしい、と頬を赤らめて沈黙するルイズに背を向けたジェラルルは、少し時間が掛かったものの自己紹介を返した。

「私はジェラルル・ジャン・バティスト・デュードネと言います。どうぞよろしく」

会釈し合う様は、ド派手な美男美女同士ということもあって、周囲に座る生徒達の関心を引いた。それを見てルイズが齒噛みしていると、教室のドアがガラツと開き、ミスタ・ギトーが現れた。長い黒髪に、漆黒のマントをまとった姿はなんとなく不気味だ。その不気味さと冷たい雰囲気のせいか、生徒たちからの人気は無い教師である。

「では授業を始める。知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』。疾

風のギトーだ」

教室のしーんとした様子を満足げに見つめ、そのまま言葉を続ける。

「最強の系統は知っているかね？ ミス・ツエルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いているんだ」

いちいち引つかかる言い方だ。

「『火』に決まっていますわ。ミスタ・ギトー」

キュルケが不敵な笑みを浮かべて言い放った。

「ほほう。どうしてそう思うのかね」

「すべてを燃やし尽くせるのは、炎と情熱。そうじゃございませんことっ」

「残念ながらそうではない」

ミスタ・ギトーは腰に差した杖を引き抜くと、言い放った。

「試しに、この私に君の得意な『火』の魔法をぶつけてきたまえ」

キュルケはぎよっとする。

「どうしたね？ 君は確か、『火』系統が得意なのではなかったのかね？」

キュルケを挑発するような言葉だった。

「火傷じゃすみませんわよ？」

「構わん。本気で来たまえ。その、有名なツエルプストー家の赤毛が飾りでないならね」

その言葉に、キュルケの顔からいつもの小馬鹿にしたような笑みが消える。

胸の谷間から杖を取り出すと、炎のような赤毛が、ぶわっと熱したようにざわめき、逆立った。杖を振るうと、キュルケの右手の上に、小さな炎の玉が現れる。呪文を詠唱すると、その玉は膨れ上がり直径一メートルほどの大きさになる。

それを見て、近くの生徒たちは慌てて机の下に隠れる。

キュルケは手首を回転させた後、右手を胸元にひきつけて、炎の玉を押し出した。

唸りをあげて飛んでくる炎の玉を避ける仕草も見せずに、ミスタ・ギトーは腰に差した杖を引き抜いた。そのまま剣を振るうようにしてなぎ払うと、同時に烈風が舞い上がる。

一瞬にして炎の玉は消え、その向こうにいたキュルケを吹き飛ばした。

「諸君、『風』が最強たる所以を教えよう。簡単だ。『風』はすべてを薙ぎ払う。『火』も、『水』も、『土』も、風の前では立つことすらできない。残念ながら試したことはないが、『虚無』さえ吹き飛ばすだろう。それが『風』だ」

キュルケは立ち上がると、不満そうに両手を上げた。それを気にした様子もなく、さらに説明が続いた。

「目に見えぬ『風』は、見えずとも諸君らを守る盾となり、必要と

あらば敵を吹き飛ばす矛となるだろう。そしてもう一つ、『風』が最強たる所以は……」

生徒達は退屈し始めていた。また『風』最強説をこんこんと説くのだろう、だから人気出ないんだよ、と講義室内の大半がギターのくどさにつんざりしているところに、空気を変える言葉が流れた。

「正確ではないな。『風』は便利で優れた性質だが、それだけでは十分ではない」

静かに風ぐ声。しかし、それは教壇の上の人物にまで確かに届いた。

「今、誰が発言したかな。『風』だけでは不十分だとか」

陰気な雰囲気の中のギターは、更に不機嫌さを増して眉間に皺を寄せた。生徒達の間にはざわめきが走る中、発言者はすつと挙手した。

「私です」

「ほう。ミス・ヴァリエールの使い魔とやらだったね、確か」

自分を揶揄する口調にも、ジェラルドは平静を崩さない。片や、隣のルイズは動揺を隠せぬまま彼を見上げている。

「そこまで言ったからには、実際に証明出来るのだろうか」

「ええ。お望みとあれば」

「よろしい。前に出たまえ」

起立したジェラルドは、ルイズを一瞥するといつももの微笑みを投げ掛け、そしてすぐにそれを消し去りすつと教壇に向かって行

った。ギトーから少し離れた位置に着くと、開始の音が掛かる。

「さあ、来たまえ」

「その前にご相談したいことがあります」

挙手したジェラルルの意見に、ギトーは軽く頷いた。それから、ジェラルルは歩み寄って耳打ちする。それが終わると、ギトーは陰気なまま少しにやついた、より気味の悪い表情で言った。

「分かった、では後ほど」

一礼してジェラルルが席に戻ると、ギトーは『風』を称賛しまくる退屈な講釈を再開し、生徒達は状況が飲み込めずに腑に落ちない気分で、受講したのだった。

放課後、学院長室ではオールド・オスマンの他、ジェラルル、ルイズ、そしてギトーがテーブルに着いていた。

朝の講義の後、ルイズはジェラルルに、ギトーに何を耳打ちしたのか聞いた。彼の答えはこうである。

『学院長から言伝てされました。ミス・ヴァリエールの進級試験の試験官を、是非貴方に務めてもらいたいとのことです。試験は私と



貴方との力比べで、仔細は放課後に学院長室にて知らされるそうですが、特別報酬ははずむとのことでした』

それを聞いたルイズは、口をあんぐり開いてしまう。いつの間になんか話になつてたのか聞くと、あのキュルケが挑発された辺りから思い付いたとのこと。

「学院長殿は、私が然るべき實力を見せることをお望みです。だから、プライドも實力もありそうなあの御仁にご協力いただければ、それを達成出来ると思つたのです。独断専行のお咎めは、私が首尾良く目的達成することで見逃してもらえenと思いますよ。昨日の最後の会話で、学院長殿は本質を見抜く思考というか、茶目っ気のある方と見えましたので」

「それにしても、何も公衆の面前で申し込まなくても」

敢えて目立つ方法を取つた理由がルイズには分からない。

「良いことではありませんが、生徒達の面前で挑まれれば、プライドの高い人はより乗り気になるかと思つたのです。どこの馬の骨とも分からぬ輩の相手をするのは、学院長殿直々に命じられても面倒臭がつて断られたり、承つてもあまりやる気を出してくれないかも知れませんか」

ギトーは、攻撃に長けた風を専門とする高位のメイジである。實力者だと分かつていながら、それに勝つのが当たり前として、しれつと言いつつジェラル。彼を信じるよう言われてはいるが、やはりルイズは不安にならざるを得ない。

「ミスタ・ギトーはかなりの實力者ですよ」

「分かります。あのキュルケさんのファイアーボールもなかなかの

練度でしたが、それをあつさり吹き払うのだから。だからこそ、彼には本気を出してもらいたい。今後のことを考えると、一流のメイジの実力を肌で経験しておきたいのです」

「勇気ある挑戦者なのか、はたまた実力者の余裕宣言なのか。ルイズには、彼がいくら何でも油断と過信が過ぎるのではないかと感じられ、警告せずにはいられなかった。」

「そんな、危険過ぎます！ あのレベルの本気の魔法を受ければ、怪我程度じゃ済みませんよ！」

「敗れて倒れるなら、私はそこまでだったということです。戦士というものは、自信も覚悟も諸手に携えて戦に向かうものです」

まるで他人事のようにあつさり流すジェラルルの涼しげな横顔に、ルイズは不安こそ消えないものの、この人が世界を統べていたというのが何となく分かったような気はした。

その後、ジェラルルが学院長室に行つてこの件の根回しをしておいたので、ギトーを交えての話はあつさり終わった。

オールド・オスマンとしては、ギトーが相手なら難度の高い試験として十分だし、もしジェラルルが重傷を負つたとしても、それはここまでの大口に対する当然の報いであつて貴人とはいえ同情すべきものではないので、彼が独断でセッティングしたことに不満は無かった。人生経験豊富なこの偉大な老メイジは、堅苦しくて実りの薄い言動は好かない傾向があるので、的を射て効率良く物事を進めたジェラルルに対し、あつさりと承認したのである。

「では、試験は二時間後に学院敷地外の草原にて行う。生徒達に見られないように十分に離れた場所、そうじゃな、中央の本塔から水の塔の方角に向け、約5リーグ離れた先とする。双方他に意見は？」

ジェラルルもギトーも首を横に振る。それをもって、この場は解散となった。

ルイズとジェラルルは飛べないので、早々に目的地へと徒にて向かう。これが試験とか無かったら、デートしているみたいで楽しいのにと晴れた気分になれないルイズと対照的に、彼女に合わせてゆっくり歩むジェラルルは悠々としている。その視線は、空を仰いだり向こうの森を眺めたりと、遠足気分ではないかと思えるほどだ。

「ジェラルル様、楽しそうですね」

「旅していた頃を思い出しましたから。ここもなかなかいい景色ですね」

「あのう。失礼かも知れませんが、ミス・ギトーは危険な攻撃魔法も使えるらしいので、大怪我するくらいなら……」

「もう少しだけ我慢してください。夕食は、きつと美味しく食べられますよ」

馬耳東風と言うか何と言うか。私なんかは何を言っても無駄だね、とルイズは溜息を押し殺してとぼとぼと歩く。

そして、フライの魔法でさっさと飛んで来て待っている、オールド・オスマンとギトーの姿が見えてくると、ルイズの表情が強張る。

「まだ時間はあるが、始めて構いませんか？」

オールド・オスマンが離れた場所から声を響かせる。ジェラールは、向こうに返事をしながら、ルイズにも声を掛けた。

「始めましょう。貴女は後ろに下がっていてください」

たたたとリスのようにすばしっこく後方へ駆けて行くルイズを認めると、ジェラールは相手の方へ歩き出す。

「さあ行くぞ。ウィンド・ブレイク！」

ギトーが杖を突き出すと、突風が草を乱暴に散らして進んで行く。それと同時に、ジェラールも術法を放っていた。

「ライト・ボール  
明闇光球」

風などお構いなしに、眩い光の玉が高速で飛来しギトーを包んだ。網膜から脳の奥まで絶え間ない明滅に襲われた感覚の中で、彼は立つことも敵わずに膝を着いた。

「くあつ、な、何だこれは！ 目が、目が見えん！」

『天』術法の初歩、強烈な光で敵の視力を奪う“ライト・ボール明闇光球”である。

「私の勝ちということでしょうか？ それならすぐにこの場で治療しますが」

「納得いかん！ 私はまだ持てる力を全く出し切っておらんのに」「戦場でそういう言い訳が通用しますか？ 相手の戦力が不明なら、最初から出し惜しみしなければ良かったのですよ」

視力を失って無力化したところに、上から目線の正論。ギトーは屈辱のせいか目が辛いせいか、閉じた目から涙さえ零れた。

「まあ、今回は勝ち負けもさることながら、君の力の底がどれほどか見てみたいというのが第一趣旨じゃ。もう一回、彼にチャンスを与えてもらえんかね？」

「学院長殿がそう仰るなら」

面倒だと思いが、自分の希望をある程度聞き入れてくれた学院長から言われては仕方が無い。とりあえず、ジェラルルは盲目の治療を行う。

「月の眠りよ 青き星の民に その癒しを与えよ 月光」  
トーン・キューア

空に薄らと浮かぶ二つ月から、先の光とは異なった白銀色の柔らかな輝きが降り注ぐ。暗闇に落ちていたギトーの目は、色と形ある世界を取り戻していく。

「おお、見える、見えるぞ」

「これで最後にしてくださいね」

ぐぬぬ、と唸って睨み付ける相手と最初の間合いまで離れたところで、第二回戦の開始が学院長によって告げられる。

「もう油断はせん！ 最初から切り札を出してやるっ！ ユビキタス・デル・ウインデ」

ギトーの体が震えたかと思いきや、三人に分身した。それまでポーカーフェイスだったジェラルルの顔が、初めて険しさを帯びる。

「分身、それも二体も使うとは。見込んだ以上に、素晴らしい力の持ち主」

「その上から視線もそこまでだ！ ライトニング・クラウド！」

三体が同時に放つ三条の雷が走る。ジェラールは辛うじて横っ飛びして直撃を回避したものの、手足を掠められたため、服が一部焦げてしまい肌も赤く焼けている。

「どうした、そら行くぞ！ ライトニング・クラウド！」

またも三人同時の雷撃が襲い来る。しかし、ジェラールも今ほどの回避と同時に術法を詠唱していた。

「天の理 地の理 ここに結びて我等が盾と為せよ 光壁」

アーク・ウォール

天地を結ぶかの如く長大な光の壁がジェラルルの眼前に出現し、危険な雷撃を弾き半減させた。薄い壁を通り越して来た時には、雷撃には先程のような威力は無く、ジェラールを掠めても服を焦がす程度のものに成り下がっていた。

「何だ、あの壁は!?!」

自慢の雷三連斉射を、見たこともない術で防がれてしまい、動揺したギトーは動きを止めてしまう。そこに、眩い壁が意外な程の速さで前進してきたため、三人共かわし切れずに弾き飛ばされる。

「ぐわわわっ！」

痺れるような衝撃の中で、自分の分身達が消えていくのを視界に捕らえながら、ギトーは意識を失った。

その晩、ルイズは約束どおりジェラルドと二人っきりの晚餐を楽しんでいた。

学院長直々に進級のお墨付きをもらい、ジェラルドの実力が口ほどにもあることが判明し、それによって彼の言っていた出自等が裏付けされたと思うことで、当面の心配事が一気に減った彼女は随分気が楽になっていた。

「ジェラルド様を疑って申し訳ありませんでした。ミスタ・ギトーを打ち負かすなんて、本当にお強いんですね。お怪我は大丈夫ですか？」

「すぐに治療術法を使いましたから、もう怪我はありませんよ。それより、貴女が安心出来たならば何よりです。貴女の沈んだ顔は、見ていて私も悲しいですから」

淡々と料理を収めていくジェラルドを見るルイズの目は、尊敬の眼差しそのものである。さっきまで心配ごとばかりだったのに、終わってみれば今日はいいこと尽くしである。明日からの日々を思うと、彼の言っていたとおり、ご飯もいつにも増して美味しく感じられる。

「まだ貴女と契約しないばかりに留年することになったら、私の方が申し訳なく思いますから。何はともあれ進級おめでとございませす」

グラスがちゃんと鳴り、互いの赤ワインが少しずつ減った。酒に弱いルイズは、最高のシチュエーションにも酔ったのか、既にほんのり赤らみつつある。

「これで私の目標は、一人前のメイジになって貴方に認められることに絞られました。それで、その、良かったらさっきの魔法とか教えてもらいたいんですが？」

ルイズが見た彼の魔法は、多様で有用なものばかりに思えた。相手を盲目にする魔法、それを治癒する魔法、敵の攻撃を防ぎつつ光の壁で攻撃する魔法、と世界の魔法だけあって、勉強家の彼女でも知らないものばかりである。

「是非そうして差し上げたいのですが、残念ながら私の力は教えられる類のものではないのです」

眉尻を下げて申し訳無さそうにしながら、ジェラルルはやんわりと断る。

「どんな理由なのだろうか。先天的才能？ 又は他者に教えることが許されていないとか？」

「私の能力のほとんどは、自分の努力で獲得したものではなく、ある特殊な術法によって他者の能力を無条件に引き継ぐことにより身に付けたものなのです」

聞き慣れない内容の説明に、ルイズは思考回路を懸命に働かせて、自分なりの解釈を試みた。

「それって、ジェラルル様のあの魔法も全部ご先祖様から代々引き継いで、何の努力もせずとも使えるようになったってことですか？」



理解の早い娘だ、とジェラルルは感心しながら頷いた。

「その魔法のお話とか、ジェラルル様の世界のこと、もしよろしければお聞かせ願えませんか？」

まだ酔いが浅い、くりつとした鳶色の双眸が真剣に見つめてくる。今後、互いを知り合う必要があるし、異世界から来たことも知っている彼女になら、寧ろ話しておくべきこともある。

「分かりました。では、私のいた世界の歴史からお話しましょう」

## 第四話 パートナーシップ

かつて世界には、現代人よりも遙かに長命な古代人が繁栄していた。彼等は非常に高度な文明を有しており、現在の人間達は短命種と呼ばれて彼等の奴隷として使役される存在であった。古代人は長命であるが故に死を恐れ、彼らにとって自らの命を脅かす魔物の存在は最大の脅威であった。

そんな中、古代人の中から七人の勇者が現れる。ワグナス、ノエル、スービエ、ロックブーケ、ダンターグ、ボクオーン、クジンシ

！。彼等は強大な魔物に立ち向かうために、ある禁忌を犯した。

古代人は、『同化の法』という技術を有していた。これは、他者の肉体に自分の魂を移し、馴染ませるというもので、これを利用して彼等は、予め準備しておいた予備の肉体に、現在の肉体が朽ちる前に乗り換えて永遠に等しい寿命を得ていたという。

勇者達は、この同化の法を改良し、新たな機能を生み出した。本来の肉体を休眠状態にしておき、新たに別の肉体を用意してそれに魂を宿らせるのである。

これによって、戦闘による死の危険にも保険を掛けることが出来る。乱暴に言えば、本体を温存することで、普段の活動に用いる肉体を使い捨てにすることも可能だった。

また、その他の改良点として、宿主たる肉体が一個のものである必要が無くなったことがある。つまり、複数の肉体を次々に同化させることによって、それまでの数倍の力を得ることが出来た。それは、彼等本来の肉体だけでなく、魔物達の肉体をも含んでいた。

そうして限りなく不死に近い存在となった彼等は、魔物達の優れた性質を吸収して戦力を巨大化し、終に魔物達を一掃した。そんな彼等を、人々は七英雄と称えるようになった。

しかし、魔物達との戦いが終わりを告げると、あまりに強大且つ不死に等しい七英雄は、同胞の古代人達にとつては新たな脅威となっていた。彼等は、七英雄を葬り去る計画を企てた。

彼等には開発中の計画があった。

その技術力によつて、彼等はこの世界がいずれは異常気象と地質変動に見舞われることを予測していた。その前に、別の世界を見付け移住するための次元転移装置を、長い年月を掛けて製作していたのだった。

そして、装置を完成させた彼等は、強靱な生命力を持つ七英雄に移転先の先遣を依頼した。だが、移転先は全く予測も付かない先であった。哀れ七英雄は、自分達が命を掛けて守った同胞に裏切られ、何処とも分からぬ異世界へ放逐されたのだ。

その後、古代人達は一部の者を残して、本来の移転先へと去って行った。そして、天変地異はこの世界を覆い尽くし、かつての地上は地の底へ沈み、あるいは砂漠と化し、密林となり、多くの建造物も廃墟と成り果てた。古代人の高度な文明は、こうして終焉を迎えた。

古代人は皆何処かに消え去ってしまい、残された短命種達の間では“いつの日か彼ら七英雄は戻ってきて、再び世界を救う”という伝説だけが残った。

時は流れ、天変地異により古代人がいなくなった世界では、かつ

て短命種と呼ばれていた人間達が繁栄していた。

バレンヌ帝国暦1000年、32代皇帝「英武帝」レオンの時代、世界は活発化した魔物の脅威に晒されており、人々は伝説の七英雄に継るようになった。

そんな折、突如として七英雄が現れた。しかし、彼等にかつて英雄と呼ばれていたころの面影はなく、それどころか魔物達を操り世に災いを為す大いなる脅威へと変貌していた。

そんなある日のこと、レオン皇帝のもとに、一人の女占い師が訪れた。オアイーブと名乗るその古代人は、『伝承法』なる秘術を授けに来たのだった。

『伝承法』とは、彼等古代人が用いていた『同化の法』の変種であり、魂ではなく能力だけを継承させるというものだった。

「そして、バレンヌ帝国と七英雄との三千年にも渡る長い戦いの日々が始まったのです。彼等の最大の目的は次元転移装置を見付けて、裏切り者達を追い、復讐すること。しかし、七英雄の中には復讐よりもこの世界の征服を企み優先する者達もいたため、私達は彼等とその配下となった魔物達と戦わなければなりませんでした」

ルイズは、さっきまでの陽気がすっかり吹っ飛んでしまっていた。あまりに過酷な歴史に、胸が詰まってしまい、食事の味も良く分からないくらいである。

「全部裏切り者の古代人が悪いんだわ。七英雄だつて、守った味方に裏切られて捨てられて、拳句にそのせいで人々が何千年も魔物達に苦しめられることになって」

彼女が悲しい目をして吐き出した正論に、ジェラルルはゆっくりと頷く。

「そうですね。死から最も遠い故に、死を最も恐れ、生きることの美しさも忘れた、あまりに弱く醜く愚かしい存在。私達はその尻拭いをさせられたのです。どれだけの時間、どれだけの血が流れたことでしょう」

眉間に手を当てて沈黙するジェラルルに、ルイズは初めて苦悩の色を認めた。

いつも穏やかに微笑んでいるこの人も、大事な人達を失って癒し難い苦痛を秘めているのだろうか。

「暗い話をしてすみませんでした。今日は早目に休ませてもらいますね」

作り笑いに苦いものが混じっている。

それを見ている方も辛くなるくらいで、ルイズまですっかりしよげてしまい、いつもよりごく早い消灯をしてシーツを被った。

翌日、ミスタ・ギトーは何事も無かったかのように教鞭を取っていた。昨日の肉体的ダメージは、ジェラルルの“月光”で即座に回復させられていたが、精神的ダメージはそうでもなかった。

「ごほん、『風』が最強の系統であろうことは、昨日も言ったとおりである。しかし、実戦の場では、それ一つだけでは対応し切れないことも考えられる。つまり、『火』『水』『土』のどれも有用であり、状況によって何の魔法が最適かは変わり得るのだ。だから、諸君は各々の得意な系統を磨いて、有事には自分と異なる系統の者と組むのが望ましい」

おおー、と生徒達から感嘆の声が合唱のように重なって表れる。あの『風』至上主義者が、昨日までとはかなり異なった趣旨のことを追加で述べている。一体何があったんだろうかと、彼等は約二名を除いて各々脳裏に疑問符を浮かべたのだった。

放課後、ジェラルルはルイズに自身の希望を伝えた。この世界の文字の読み書きを学びたいと。

未知の国、世界に来たなら必ずやっておきたいのは、何と云っても情勢を知ること。真っ先にすべき衣食住の確保については達成されたので、次はその世界の現在情勢や過去の歴史、一般的な慣習及び価値観等を知りたいところだ。

彼の要望に対してルイズは快諾し、一緒に図書館へ向かった。そこで幾つか簡単な本を見繕うと、借り出して自分の部屋へと戻ったが、その途中で最も会いたくない人物と遭遇してしまった。

「あら、こんな所で会うなんて奇遇ね」

妖艶さと健康さがいい塩梅に配分された魅力的な笑顔。南国をイメージさせるキュルケに、ジェラルルも会釈して応じる。

「私達急いでるの」

ジェラルルの手を引くと歩行速度を急に上げたルイズには構わず、キュルケはその反対側のジェラルルの隣に並んで付いていった。

「今日のミスタ・ギトー、人が変わったみたいだに謙虚だったけど、あれって貴方が何かなさったんじゃないか？ 昨日の講義中のことと関係あるとか」

大当たり。ルイズは顔に少し出たが、小柄が幸いしてジェラルルの陰になっているため、それに気付かれることなく歩き続けた。ジェラルルの方は、ぴくりとも表情を変えることなくポーカ―フェイスを堅持。大した役者ぶりである。

「さあ。私も分かりませんが、教師がより柔軟な思考と広い視野を持つようになったのは、生徒にとっても本人にとっても喜ぶべきことだと思います。教師の質が、生徒の成長に大きく影響するのは間違いないですから」

完全に他人事として話すジェラルルにそれ以上突っ込みようもなく、キュルケはその場で足を止めて彼等の背中を見送った。その顔には意味ありげで茶目つけある微笑みが浮かんでいた。

自室に戻ると、ルイズはジェラルルに読み書きのマンツーマン指導を始めた。高い知性によって、常人に比べると倍以上の速さで文字を覚えていったのは流石だったが、簡単な書物でもまだすららと読みこなすには至らず、分からない文字をルイズに聞いては、自分でも声に出しながら書き出していく。一冊目の後半に入ったところで日も落ちてしまったので、使用人に料理を運ばせて夕飯を摂ることにした。

「ジェラール様、字の覚えが凄く早いです。一月もあれば、大抵の書物は読めるようになるんじゃないかしら」

「早くそうなりたいですね。この世界のことを、色々知りたいんです。知らないことだらけでは、何につけても不便ですから」

生来の知的好奇心とバレンヌ帝国での職務により、ジェラールは活字に親しむこと呼吸をするが如くであった。彼のご先祖であるジェラール一世も活字中毒的気質があったそうだが、子孫の彼も多分にそれを受け継いでいるのだろう。

だから、ルイズに教わって異世界の書物を読めるようになるのが楽しみで仕方が無いのだった。夕食が済んだら、すぐにも続きに取り掛かりたいと思うほどに。

「基本的な文字以外にも、ルーン文字もありますし、そつちもおいおいお教えしますわ。ジェラール様なら、そちらも砂地が水を吸う如くに覚えられるでしょうね」

「ありがとうございます。でも、いいんですか？ こんなに時間を割いてもらったら、貴女自身の勉強や練習の時間が無くなるのでは？」

ジェラールのごく当たり前の気遣いに、ルイズの表情が翳る。勉強面では、生真面目で努力家の彼女は授業の内容以上の所まで自学自習しているため、当面の問題は無い。魔法の練習の方が問題なのである。

「いいんです。勉強はずっとこつこつやってるから、授業の進度を追い越してますし、魔法の練習だって、どうせまた失敗しかりしないだろうし」

ルイズは元気に笑ってみせたつもりだった。しかし、ジェラールの漆黒の瞳はそれが虚飾だとあっさりと看破してしまった。



「私に協力出来ることはありませんか？ 貴女が字を教えてください  
ことのお返しをしたいのです」

嬉しかった。特殊な手段でジェラールが習得した術だから、彼から魔法のことで教わることは出来ないとしても、その心遣いだけで胸が温かくなる。それは、お風呂に浸かって血行が良くなる感じに似ていた。

「ありがとうございます。お気持ちだけで十分過ぎるくらい嬉しい  
です」

少し目頭が熱くなったので、彼女は目線を落としました。その感激の度合いの大きさを見逃さなかったジェラールは、彼女の心の琴線に触れたのは何なのか、文脈から推測してみる。魔法を失敗ばかりしていると言っていたが、魔法に関して劣等生なのだろうか。

術法を“継承”した自分には、人に教えることは出来ない。どうやって覚えたかという通常踏むべき過程、“練習”というものを要しなかったのだから、コツというものが分からないのだ。だから、高度な術法も手足を動かすように当たり前に使えるものの、術法の教師適性に関しては最低なのである。

そんな自分が彼女のために出来ることは何か。無言で考えながら黙々と肉を切っては口に運ぶジェラールの手に、小さな羽虫が留まった。それに気付いた彼は手を空中で止め、留まった虫を暫くじつと見ていた。

「ジェラール様、どうかなさったんですか？」

気になったルイズが声を掛ける。それに対し、ジェラールはにっこり微笑んで彼女に勧めた。

「明日の放課後、近くの森に行きませんか？ 見せたいものがあります」

## 第五話 ルイズと虫

翌日の放課後、ルイズはジェラルルのお誘いを受けて学院郊外の森に来ていた。魔物が出るという話はほとんど聞かない、安全と言いつてもいい地域である。

ジェラルル様だったら、字を教えたお礼に私のために時間を割いてくださるなんて律儀だわ。これってデートみたいじゃない。

ルイズは、昨晚からわくわくしたままの状態が現在まで続いている。恋する乙女は往々にして浮かれポンチになりがちだが、当のお相手はいつもの優しげなポーカ・フェイス。端から見れば、仲睦まじい二人であるが、その心境が同じ方向を向いているとは必ずしも限らない。

森に足を踏み入れて、木漏れ日と陰が織り成す網を暫く潜って行くと、ジェラルルは足を止めてルイズに声を掛けた。

「ルイズ、貴女に見せたいものがあります。私の傍に来てください」  
落ち着いた声が、静かな森の中にこだまして消える。ちよこちよこつと彼にくつつくルイズは、さながら木に寄り添う小動物のようである。

「これを持ってみてください」

ジェラルルは、腰に引っ掛けていた布巻きしてある得物を取り外すと、その頑丈そうな布を巻き取っていく。すると、ルイズが見たことのない形状の剣が全容を顕にした。

片刃の湾曲した造り自体がトリステインでは珍しいが、刃の中間

部が先端部や根元部分に比べて女性の腰のようにくびれている。柄部分も、茶色の芋虫が左右に付いているような妙な形状だし、親指から中指までを通す護拳部分などその芋虫から生えている足のように見える。貴族令嬢が好印象を持つ類の形状では決してないと言えよう。

「え、こ、これって、虫みたいですけど」

ルイズもその例外に非ず、その見かけについて躊躇してしまう。剣の持ち主は、お構い無しに彼女に握らせたのだが。

「や、きゃあつ」

「大丈夫ですよ。本物の虫ではありません。寄蟲剣フォームスレイヤーと言って、私の世界の古代人が作ったと伝えられる特殊な剣です。怖がらずに、先端を地面に立ててください」

ルイズは言われるままにする。正直気色悪いのだが、ジェラルムの大きな手が彼女の手に覆い被さっているのと、信頼する彼の言葉により、乗り気になれないながらも、そのままじっとしてみた。

「今からこの剣に宿る力をお見せします。蟲群集来スウォーム」

ルイズの体内を未知の感覚が走った。何か、無数のものが迫ってくる、そのうねるような力の流れが何故だか分かる。何かが疾走する音さえ感じられるような気がする。全身の細胞がそれを知覚するかのようなのだ。

それらは近くのものだけでなく、草木の奥から群れとなって駆け、空からも飛んで来る。蟻、蚤、団子虫、蜘蛛、黄金虫、百足から羽虫、蠅、蛇、蜂まで地に空に黒々とした群れとなって、二人の間を囲んだ。

「き、きゃああああー!!」

黒く蠢く無数の群れ。少女ならずとも、大の男でも悲鳴を上げても許されるかも知れない。それほどに、異様な光景であった。

剣から手を離すと、ルイズはジェラルルの胸にしがみ付く。そして、自分がどれほど驚き慄いているかを必死で訴えかけた。

「ジェラルル様、あの虫達を追い払ってください！ 私、このままじゃ無理です！」

ルイズの決死さが伝わる言葉に、ジェラルルは残念そうにしながらも訴えを受け入れた。

「そうですね。もつと見てもらいたかったのですが、残念です。解散させましょう」

何の合図にもよらず、虫達は各々の住処に帰って行く。ジェラルルの胸に顔を埋めるルイズが見ることはなかったが、地上のそれは夜の海で波が引くように鮮やかであり、空中のそれは黒い煙が空へ拡がり散っていくようでもあった。

「もう大丈夫ですよ。虫達は去りました」

ジェラルルの言葉に恐る恐る顔を上げたルイズは、周囲をゆっくり見回して安心すると、珍しくジェラルルを非難した。

「ジェラルル様、酷いです！ 女の子があんなの見せられたら、誰だってびっくりして怖がります！ 字をお教えしたお礼にしては、あんまりなんじゃないですか!？」

恨みがましいルイズの目は潤んでいた。そんなつもりは無かった。ジェラルルは、困惑したように眉尻を下げたまま、とりあえず謝る。「すみません。怖がらせるつもりはなかったんです。特殊な力を持ったこの武器で、魔法を扱うのに似た体験をしてもらおうと思ったのですが」

頬をぽりぽりと搔く彼の目は、困ったようにやや力弱く、けれど変わらず優しい。そして、その言葉も然り。

自分に魔法を使うような体験をさせようとしたのは何故か？魔法が苦手な自分の、少しでも気分転換になればと思つてのことだろう。

森に行こうと彼が言い出す直前、自分の魔法が失敗ばかりだと言つたのを、ルイズは思い出した。

嬉しい。やっぱりこの人は優しい方だわ。

ルイズは、不満と驚きで愚図つていた顔を、ぱつと明るくさせて言つた。

「こちらこそごめんなさい。私、驚きのあまり、ジェラルル様の心遣いも分からなくて」

「いえ、女の子が怖がるのは当然でしたね。私ももったいぶつたりせずに、事前に説明しておくべきでした」

フォームスレイヤ

寄蟲剣に布をぐるぐると巻き付け始めるジェラルル。その手に、ルイズは小さな白い手乗っけて宣言した。

「私も今の魔法が使えるようになりたいです。教えてくださいます」

か？」

緊張を残すものの、ルイズの目に先程の怯えや萎縮は見受けられない。決意を見て取ったジェラルルは、微笑んで頷くと布を外し始めた。

結局その日の成果は、一度に数十匹の虫を呼び寄せられる程度に留まった。ルイズが自身に課した百匹の目標は達成出来なかったが、日が暮れてきたので二人は学院に向かって歩き出した。木漏れ日が金色を帯び、木々のカーテンの隙間に見える空は茜色と青色が徐々に各々の領域を変えつつある。森を抜けると空全体の色を見渡せるようになり、ジェラルルは歩きながら大きく伸びをした。

「綺麗な夕空ですね。青空と夕空の境界が淡い桃色で、貴女の髪のようにですね」

「そうですね？ そんな風に譬えられたのは、ジェラルル様が初めてです」

褒められて嬉しいルイズ。夕焼けに染まる草原を渡る心地良い風を頬に受け、彼女はもっとジェラルルと話をしたいと望む。

「ジェラルル様、どうすればあんな風に沢山虫を呼べるんですか？」

ルイズの質問にジェラルルが答えられることと言えば、結構単純なものではなかった。

「私と手を重ねて行った時の感覚はどうでしたか？」

あの未知の感覚を、ルイズは思い出ししてみる。

それらの存在が目に見えずとも分かっていたあの感覚。こちらに向かつて集まって来る感覚が分かった。理屈で説明出来ないものが感知出来たとでも言うべきか。

「何だか不思議でした。何故か分かってしまったんです、こっちにやって来るとというのが。一人でやってみたら、良く分からなくなっちゃったけど」

見上げるルイズの視線を優しく受け止めたまま、ジェラルルは説明した。

「この技は、全く術法の使えない者でも上手く使いこなしてました。つまり、こちらの世界でも魔法とはあまり関係無いでしょうね。必要なのは」

「必要なのは？」

大事などころで言葉を切って黙った彼に、ルイズは即座に言葉を繰り返して続きを促す。ジェラルルは足を止めると、その場に座り込み、そして天を仰いで寝転がった。

「彼等を感じようとする。つまり、彼等がこの大地で生きていくということ想像し、その息吹を感じ取ろうとするのです。寄蟲フォームスレ剣には私達の念を増幅して発信し、虫からの念を増幅して受信する機能があるのです」

マジック・アイテムの一種だと、ルイズは理解した。このハルケ



ギニアには様々なマジック・アイテムがあるので、ルイズはその類のものは聞き慣れていたが、このように虫を呼び寄せたりするものは初耳である。

「大地に生きるものの息吹を感じ取る……難しそうですね」

彼の説明に戸惑いを隠せないルイズ。魔法の才能が関係無いと言われたのは随分気楽になるが、抽象的な彼の説明を具体的にはどうすれば良いのか分からないのだ。そんな彼女に、ジェラルは自分の脇のスペースをぼんぼんと叩いてみせた。

「まあ、とりあえず寝転がって。案ずるより産むが易いですよ」

言われるままに隣に寝転がるルイズ。茜色と金色が入り混じった空を見上げたまま、ジェラルは隣に聞こえるように話す。

「聞こえるでしょう、虫の声が」

「ええ」

キロロ、キロロと虫達が奏でる音が聞こえる。単調な繰り返しなのだが、聞いていると自分の中のリズムも単調になり、思考も聴覚も単純化して何故か落ち着いてくる。

「虫達は植物や、もっと小さい虫を食べて生きています。その虫を食べる小動物がいて、その小動物はより大きな動物に食べられる。その中には人間も含まれます。こうやって、この世界は連鎖的に成り立っているのです」

「分かります」

「私達人間は、この連鎖の中では上位の食べる側に位置します。だからと言って、小さな虫や動物を下等と見なしたりするのは、この

世界全体の理としては誤りです。皆それぞれの役割があつて、それを全うしているのです。その誰が欠けても、この連鎖は崩れ、ひいては世界全体の存続の危機となります」

ジェラルルの言うことは尤もだと思ひながら、すんなりとは理解出来ない部分もあつた。人間の間でさえ、貴族と平民という明確な線引きがあるのだ。ましてや虫や小動物なんて、大概の人が下の存在と見なしがちだとルイズは思う。

「虫がいなくなつたら、それを食べる小動物がいなくなり、更にそれを食べる筈の大型の動物や、私達人間まで生きていけなくなるということですよ。それは分かります。でも、虫は虫であつて、人間と同列に見ることは難しいと思いますが」

「同列に見なくてもいいんです。立場に強弱はあつても、尊重し合うことが大事なのです。小さいものも大きなものも誰もが不可欠で、支え合つて生きています。だから誰もが尊重し合うべきなのです。色々な生き物が共存すること、それが世界の美しさであり素晴らしさなのですから」

ルイズの方に首を向けたジェラルルは、彼を見ていたルイズと目を合わせて笑つた。嬉々として揺れる黒曜石のような瞳に、ルイズは吸い込まれるように目が離せない。だから、そのまま色々今の話とかを考えてみる。

ジェラルル様つて、元皇帝陛下だったとは思えない不思議な考え方をする方だわ。この世界の何もかもを愛しているような考えだけ、憎んだり嫌つたりするものつて無いのかしら。

視線を合わせたままの二人。そこに、ジェラルルは手を伸ばしてルイズの指に絡めてきた。

「こつやって、私達のように誰もが手を取り合って生きていければ最高なのですが」

そして、ゆっくりと上体を起こすジェラルルに合わせてルイズも起き上がった。陽光に照る色で誤魔化し切れないほどに紅潮したルイズだったが、勿体ないのでジェラルルの手を離すようなことはせずに並んで歩いた。その間、彼の言葉を反芻してヒントを得ようとしたものの、結局部屋に帰るまであまり頭が回らなかった。

それから毎日放課後になると、ルイズは森で虫を呼ぶ練習をするようになった。教師兼警護役のジェラルルも同伴である。

敬愛するジェラルルの言葉を、暇な時には反芻して自分なりに頭でなく心で理解できるように彼女は努めた。貴族と平民の關係に譬えれば、平民を守る貴族とその貴族のために生産する平民は互いに尊重し助け合うものだ、という風に。

ルイズは三女であり、実家には大好きな次姉の“ちいねえさま”がいるのだが、彼女はとても慈愛に溢れた人物で、部屋は大小の動物だらけなのである。ルイズも別段動物は嫌いではないが、到底姉の域には達していない。

ちいねえさまなら自分なんかよりずっと上手く虫を呼べるんだろうな、とその姉のことを思い出すと、ルイズは自然と元気が出た。敬愛するジェラルル様に習い、最愛の姉のような心になれるよう頑張ろうと。

そんな彼女は着実に能力を伸ばしていき、生まれてこの方得るこ

とのなかった充実感を味わっていた。それは、魔法の練習において体験することのなかった“上達”の実感。努力すれば僅かであつても前進出来るという正当な報酬。そして、それにより得られる自信が、次なる努力への活力を生む泉となる。齢十六にして、彼女は初めて好循環というものを体験していた。

「ジェラール様、見てください」

初日の何倍も呼べるようになった虫の数。ルイズは嬉しそうに彼の下に駆け寄ってくる。

「随分呼べるようになりましたね。初日に比べると凄い成長ぶりです」

ジェラールはにこやかに微笑んで、彼女のふわふわの細い髪を手櫛で梳かした。そうすると、ルイズは日向ぼっこする猫のように心地良さそうに目を閉じるのだ。

「私、もっともつと練習して呼べるようになりますから」

「ええ。貴女ならきつと出来ますよ」

ジェラールに褒められると、彼女のやる気はますます加速する。愛弟子の目に見えるほどの成長振りを、彼は毎日満足して見守っていた。当初は虫群を怖がり嫌っていたルイズの姿はもうどこにもない。

## 第六話 ゼロからの脱却

その日、ルイズ達は『土』系統の魔法の授業を受けていた。教師は『赤土』の二つ名を持つ女性ミセス・シュヴルーズ。ふくよかでおっとりした雰囲気の中年女性である。

「皆さん、今日は前回の続き、『錬金』の魔法についての勉強をします。では、簡単なおさらいからしましょう。ミス・ヴァリエール、前に出てこの石ころを別の金属に変えてみてください」

今回最初に指名を受けた生徒はルイズだった。ルイズは返事をせず、緊張した面持ちでいる。ジェラルルは、魔法に自信が無いからだなどと理解し、体を寄せると彼女の耳にだけ届くように静かに言葉を流した。

「失敗しても気にすることはありません。私はそんなことで貴女を評価したりしませんよ」

学院の誰も掛けてくれない優しい言葉に、ルイズは顔がふにやりと緩みそうになる。けれど、やはり元の緊張状態にすぐに戻ってしまった。

「でも、私の失敗は普通じゃないんです」

ネガティブそのものの雰囲気と言葉。彼女のほんの数分前までの明るい様子が失われてしまったことを、ジェラルルは残念に思う。更に、ジェラルルを挟んでルイズの反対側に座るキュルケが、困った声で教師に訴える。

「先生、やめておいた方がいいと思いますが・・・」

しかし、ミセス・シュヴルーズはその言葉を理解出来ずにきよんとして言う。

「どうしてですか？ この魔法は比較的簡単ですよ。それに彼女は努力家とも聞いています。さっきも言ったように、失敗を恐れて何もしなければ、失敗はしないかも知れませんが成長もしません。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやってごらんなさい」

額に手を当ててあちゃーと漏らすキュルケの顔は蒼白くなっていた。

「ルイズ。お願い、やめて」

幾ら怨怒つのる間柄とは言え、中立地帯であるべき学び舎で侮辱が過ぎる、とジェラルは黒曜石の双眸に不服を込めて、声の主に向けた。その類稀な眼力にキュルケは押し込まれるが、それでも真面目に真意を訴えた。

「意地悪で言ってるんじゃないわ。その娘の失敗は洒落にならないのよ」

ジェラルは、キュルケ以外の生徒達も一様に顔面蒼白になっているのに気付いた。

それほどに恐れられているのは何なのか。それほど恐ろしいことならば、何故あの教師はルイズにやらせようとする。生徒達がそんなに恐れていることを、教師が何故知らないのか。

「やります」

ルイズは覚悟が決まったのか、キツパリと言い切った。誰よりも可愛らしい上に凜々しいその横顔に、ジェラルルだけが満足そうに微笑み、他の生徒全員が机の下に隠れ始めた。

彼女を教壇に向かわせるのは、ジェラルルの前で情けない姿を見せたくないという、ただその一心であった。

失敗してもいい、そんなことで見下さないとやってくれた彼を、臆病さで失望させたくない。周囲の目はもうどうでもいい。唯一自分のことを見つめてくれるジェラルルのことだけを思っ、堂々と全力でぶつかる。そう決めた彼女に、最早怖いものなど無かった。

教壇の前に立つと、ルイズは眼を閉じて考えてみる。

これまで私は失敗ばかりで、教室の皆にも迷惑を掛けてきた。今となつては、誰も自分の魔法など望んでいない。そればかりか、友達の間にもいない。私が落ちこぼれたから。

でも、ジェラルル様っていうそれは素敵な味方が出来た。大らかで優しく、不思議な方で、一つも楽しみが無かった私の学院生活に、虹のように鮮やかな色を付けてくれた。

だから、今はこの方のために頑張りたい。これまで何千回と繰り返してきた一つ覚えの失敗なんてうんざり。見下さないとは言ってくださるけど、やっぱり私自身も大嫌いないつもの失敗なんて、ジェラルル様の見ている前でしたくない。

私だって出来るんだってところを、見てもらいたい。そして、あの薔薇色の微笑みを受けながら褒めてもらいたい。

ルイズの肚は決まった。今の自分が唯一成功させられることに全力を尽くそうと。そして、そのための意識集中を行う。

マントの下に隠した背中、剣から、自分の中に幾つもの何かがあるような感覚。『来なさい』と彼女が念じれば、川の流れのようになうねりが彼女の内に返って来る。無数のざわめきが聞こえるような気がした時、いけると思った。

「スウォーム 蟲群集来！」

窓という窓から、黒々とした群れが行進してやって来る。空からも地上からも。

机の下に潜っていた生徒達は、床と空中を走る虫達の大移動を見て言葉を失った。誰もこんな異様な光景を見たことがなかったのである。

ルイズとシュヴルーズを中心に半径一メートルを空け、彼女への臣従を誓うかのようにびたつと停止した空と地の蟲のカーテンに、『土』系統の高位メイジである女性教師も言葉を失ってしまった。

「ミ、ミス・ヴァリエール。こ、この虫達は一体……」

両手を口に当てて辛うじて声を絞り出す教師に答えるより先に、ルイズは唯一人平然と席に座る人物の方を見た。彼は、苦笑しながらも人差し指を優雅に唇に当てて、愛弟子に意思を伝えた。

「ごめんなさい、ミセス・シュヴルーズ。私、また失敗しちゃいました」

蟲群が波のように引き雲散霧消した後、屈託無く笑うルイズをとっても可愛らしいと思う余裕のある人物は、彼女にこの技を覚えた当人のみであった。



それ以降、彼女を『ゼロ』と蔑む声は、少なくとも表立っては聞かれなくなった。

彼女の魔法の失敗は、教室内とそこにいるもの達に少なからぬ被害を与えるために恐れられていたのだが、今度からは別の理由で一層恐れられるようになった。

あの虫の大群に襲われたらと思うと、誰もが縮み上がる気分になるのだ。いざあれに襲われた場合、完全に対応し切れる自信のある者は皆無だったし、全身に纏わり付かれたことを想像すると、男女問わず誰もがげんなりするほどの嫌悪感を抱いた。

だから、ほとんどの者がルイズを敵に回したくなくなったのだ。

「今回は大目に見ますが、あれは無闇に見せびらかすためのものではないですよ」

放課後、森の練習場に向かう道すがら、師からやんわりとたしなめられていた。いけないことと分かつてはいたので、ルイズは神妙な顔付きで反省する。

「申し訳ありませんでした。もうあんな使い方はしません。でも…」

「でも？」

ジェラルルは問い詰めるではなく、優しく言葉を繰り返して続きを待った。

「私、失敗したら爆発を起こすんです。先生が巻き添えになって気絶したり、驚いた使い魔達が暴れ出したり、教室中が目茶苦茶になっってしまう。だから、皆から『ゼロのルイズ』って馬鹿にされて、いつも嫌な思いをしていました。ジェラール様には、そんなところを見られたくなかったです」

小柄なルイズが俯くと、ずっと長身のジェラールからは更に小さく見えた。彼には、既に彼女を責めるつもりは無かった。

「そうだったんですか。辛い思いをしてきたんですね」

ジェラールが彼女の小さな手を握ると、少し驚いた顔で見上げてきた。

「貴女が失敗しかないわけではないことは、先程皆の前で証明されました。だから、次からは普通にやって堂々と失敗しなさい。もう誰も貴女のことをそんなにとやかく言わないと思いますよ。あれを見せられた後では」

ルイズはさっきの光景を思い出してみる。ジェラール以外の全員が驚愕し、戦慄さえしていた。

これからは、自分は馬鹿にされるのではなく、恐れられ避けられるのかも知れない。だが、友達でも何でもない連中だから、それでも構わないとルイズは思う。

「はい、ジェラール様」

ルイズは愛くるしい笑顔で答えた。自分はもう孤独じゃない。ジェラール様がいつも見守ってくれる。そう思うことで、心が強くなれる気がしたから。

翌日の一限目、どの生徒達もよそよそしく横目でルイズをちら見する中、正面から堂々と声を掛ける者が一人だけいた。

「おはよう、ルイズ。そして、ミスタ・デュードネ」

「おはよう、キュルケ」

「おはようございます、ミス・ツエルプストー」

キュルケは相変わらず物怖じもせず、陽気で瀟洒な雰囲気振りまきながら挨拶してくる。宿敵ツエルプストーに懾然として返すルイズと、にこやかに爽やかな挨拶を返すジエラルの様子は見事に対照的であった。

「これまで貴女のことを『ゼロ』なんて言って悪かったわ。昨日の件で、貴女のことを見直したの」

随分殊勝なことを言うものだ。宿敵同士、女子の中で一番自分からかっていたのはキュルケだというのに。  
ルイズは油断せずに構える。

「だから、これからは別の二つ名で呼ぼうと思うの。そう、『蟲姫』のルイズなんてぴったりだと思っわ」

予想の斜め上に行く言葉を受けて、ルイズは思考が急に鈍化した。これは受け入れてよいものだろうか、それとも拒絶するべきか。余裕に満ちた宿敵の不敵な笑みを見るに、やはり拒絶すべきものだと習慣的反射で彼女は理解した。

「そんな二つ名いらないわよ！ 二つ名なんて無しの、ただのルイズでいいわ」

「そんなメイジ聞いたことないわ。『ゼロ』でも『蟲姫』でもなければ、貴女の特徴って何？ そうだわ、『貧乳』のルイズがあつたわね」

ルイズの二番目のコンプレックスである、平たい胸。絶世の美女とまで謳われる母の容姿を色濃く受け継いだルイズは、唯一の欠点とでも言うべきその見事に絶壁な胸をも引き継いでしまっている。それを、よりによって宿敵で爆乳のキュルケに指摘されたものだから、そりゃあ堪らなかつた。

「……あんたの邪魔くさい胸から虫の餌食にしてやるわ」

わなわな震え出し目が据わってしまったルイズの物騒な言葉に、会話を聞いていた周囲の生徒達は慄然として固まる。しかし、それを向けられた当の本人はと言えば、余裕しゃくしゃくでジェラルルの肩に両手を当て、ルイズとの間の壁代わりにしてふざけてみせた。

「や〜ん、怖い。ジェラルル様、助けて〜」

その言動が、更にルイズの神経を逆撫でしまくる。彼女は、ジェラルルの前にも関わらず、とうとう可愛らしい少女を演じることが出来なくなってしまった。

「あんた！ ジェラルル様に触るんじゃないわよ！ それと、あんたがその呼び方するなあっ！！」

照れ以外の理由で真っ赤になったルイズは、小さい拳を振りかぶ

つてキュルケに向かう。キュルケはうふふ、あははと笑いながら隣の花に向かう蝶のように軽やかに離れていく。うううと唸るルイズの両肩に、背後にいるジェラルルが苦笑しながら優しく手を置いた。

「可憐な貴女でも、あんなに強く怒るんですね」

「なつ、私、そんなはしたない娘じゃないんです。あれは、キュルケがあまりに失礼だから」

首だけ振り返りながら言い訳するルイズの顔は、困惑して真っ赤になっている。ジェラルルはいつもと同じく優しい笑顔でただ受け止めた。

「いいんですよ。若い娘はおしとやかなだけじゃなく、年齢相応に元気もある方が好ましいですからね」

自分でもはしたないと思う振る舞いだったのに、ジェラルルは変わらず肯定し受け入れてくれる。そんな彼に、ルイズは心が落ち着き満たされるのだが、ここまでずっと品の良く可愛らしい淑女として振る舞ってきたつもりだったのに、今で台無しになった気がしてやはり残念な気持ちは否めない。

故に、キュルケのアホ、バカ、ろくでなしと心中でボロクソにこき下ろすことでどうにか悔しさを発散させようとしていると、『火』系統の担当教師である禿頭のミスタ・コルベールが教室に入ってきた。

「えーおほん。皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとって、良き日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります。恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に立ち寄られます」

その言葉に、教室がざわめいた。

「従って、粗相があつてはいけません。今から全力を挙げて、歓迎式典の準備を行います。そのため本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること」

教室の皆が、緊張した面持ちで一斉に頷いた。そして、教室の入り口に向かってぞろぞろと動き出した。

「ルイズ、正装するよう言われましたが、私はこの普段着しか持っています。生徒ではないからいいのでしょうか？」

寮に戻りがてら珍しくジェラルルの方からされた相談に対し、ルイズは暫く黙って考え、そして見解を出した。

「それでいいと思いますわ。ジェラルル様は生徒ではないですから、咎められることはないと思います。それに、気品や威厳が尋常ではありませんから、服が平民のものでも決して周りに見劣りしないかと」

真顔で言うルイズに、ジェラルルは一言ありがとうと述べた。

正装した生徒達が整列して静かに待つ中、魔法学院の正門をくぐって、王女の一行が現れると、待ち侘びた貴族子弟達が一斉に杖を掲げた。正門をくぐった先にある本塔の玄関には、学院長のオールド・オスマンが賓客をじっと見守っている。

四頭のユニコーンに引かれた馬車が止まると、人が駆け寄り、馬車の扉までじゅうたんを敷き詰めた。呼び出しの衛士が、緊張した声で王女の登場を告げる。

「トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな　　り

」！

しかし、扉を開いて現れたのは、灰色のローブに身を包んだ老人だった。実質的な為政者とも言われるマザリーニ枢機卿である。彼は馬車の横に立つと、続いて出てきた女性の手を取った。

生徒達の間から一斉に歓声が沸き起こる。

楚々として光を放つような気品のある顔立ち。肩口まである紫の髪と、南の海のような薄く明るい青の瞳は、それだけではただの美しさに過ぎないかも知れないが、この人物が放つ眩さを浴びると、他に比べるものも無いある種の至高へと辿り着くのか。それが、ジエラルルの見た王女の感想である。

年の頃はルイズ達と同じくらいに見えるが、彼の隣にいる、精緻の粧を尽くして可憐さを造形したかのような少女でさえ持たぬ何かがある、とも彼は感じる。

そんな王女はにっこりと微笑むと、優雅に手を振った。

ルイズの方を見ると、彼女は真面目な顔をして王女を見つめている。王女とその周辺に注意を多目に割いていたジエラルルは、ルイズの表情がやがてはっとして変わる瞬間を見逃してしまった。

## 第七話 夜揺らす来訪者

ルイズは注意を奪われていた。

その視線の先には、見事な羽帽子を被り、鷲の頭と翼と前足、獅子の胴体と後ろ足を持つグリフォンに跨る、凜々しい貴族の姿があった。

ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールド。もう何年も会っていないかった、何年も思い出すことのなかった、子供時代の思い出の人。あの頃に比べると、見違えるくらいに大人の雰囲気纏っている。ヴァリエール家と隣接する領地の子爵家の嫡男で、親同士が冗談交じりに決めたルイズの許婚。魔法の出来が悪く、母に叱られて落ち込む幼少のルイズを慰めてくれた、優しい兄のような理想の王子様だった。

今の彼は、姫殿下を護衛仕るエリート中のエリート、魔法衛士隊に所属しているようである。堂々と進む彼を見つめるルイズは、随分立派になられて、と昔のことを思い出しながらついほろりとなる。かつて彼と過ごした時間もまた、輝きと憧れに満たされた素晴らしきものだったから。

そして、今自分の隣にいる人もまた、その頃以上に満ち満ちた体験をさせてくれている。ルイズはその人に視線を向けた。

どちらも素敵だけど、ジェラルル様の方が若々しく見える。ジェラルル様って何歳なのかしら。二十歳くらいかしらね。

ルイズもやはり年頃の乙女である。最初に比較したのは容姿だった。

二人とも目を見張るような美男子だが、タイプは結構違う。杖をもって驚ぐひさという自負を、無言のオーラで語っているようなエリー



トのワルド。生半可な腕の者が束になってかかろうと、軽く挨拶伏せそうな強者の佇まいがある。片や、強そうと言ふよりは優雅さがずっと勝って見えるジェラルルは、戦士よりも芸術家と言われた方が信じてしまುದらう、優美で穏和な雰囲気醸し出している。ギトーに大勝するほどの並外れた実力者だとは、この目で見てなくてはルイズだつて信じられない。

二人の人間性については、比較のしようがなかった。ジェラルルとは、毎日一緒にいるから何となく分かりそうだが、ワルドとはもう何年也会っていない。

二人をちらちらと落ち着きなく見比べていると、ふとジェラルルと視線が合う。内心びっくりしたルイズは、反射的に愛想の良い作り笑いをしたが、その理由が分からなかったジェラルルは、柔和な表情のまま軽く首を傾げたのだつた。

夜が更けて、もう就寝の時間になるというところだつた。

何故か今日の式典の辺りから、ルイズはどこかうわの空で呆けているところがあり、ジェラルルは少し気になっていた。

「ルイズ、今日はちょっとぼうつとしてましたね。熱でもありませんか？」

夕食までの間に、自分と相手の額に片手ずつ当ててみたが、その時は平熱のように感じられた。

「え、そうですか？」

その言葉にルイズは軽く驚いたように見えたが、その驚きが想定外のことによるものではなく、内心自覚しているところを掠めるように指摘されたからだとジェラルは何となく感じ取った。

素直に心を開いてくるいつもの彼女と違い、何か明らかにならなうとはしないものがある、と彼は違和感を覚えている。姫殿下一行の中に、誰か気になる人でもいたのだろうかと彼は推測していた。

今日のところは追求せず、明日以降も続くようなら聞いてみよう。そう考えていると、夜分遅くのノック音が聞こえた。

「こんな時間に来客ですか」

ノックは規則正しく叩かれる。初めに長く二回、それから短く三回……。

そのノックの仕方に、ルイズが真っ先に反応した。急いで立ち上がると、ドアを開く。そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾を被った少女だった。

少女は辺りを窺うように首を回し、そそくさと部屋に入ってきて、後ろ手に扉を閉めた。

「……貴女は？」

ルイズが驚いたような声を上げたが、頭巾をかぶった少女は、口元に指を立てた。それから、頭巾と同じ黒のマントの隙間から、杖を取り出すと同時に、短い呪文を唱えながらそれを軽く振るった。それと同時に、光の粉が部屋を舞う。

「……探知？」  
——ディテイクトマジック

ルイズが尋ねると、少女は頷いた。

「どこに耳や目が光っているか、分かりませんかね」

部屋の中を舞う光の粉が無くなると、少女は頭巾を取った。そこに現れたのは、あのアンリエッタ王女だった。

「姫殿下！」

ルイズは慌てて膝をつく。アンリエッタ王女は涼しげで澄んだ声を発した。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

ルイズの部屋に現れたアンリエッタは、感極まった表情を浮かべて、膝をついたルイズを抱きしめた。

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へ、お越しになるなんて……」

畏まって応じるルイズ。しかし、アンリエッタはそれに反論する。

「ああ！ ルイズ！ ルイズ・フランソワーズ！ そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！ 貴女と私はお友達！ お友達じゃない！」

「勿体無いお言葉でございます、姫殿下」

それでもルイズの声からは緊張が消えない。

「やめて！ ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をして寄って

くる欲の皮の突っ張った宮廷貴族達もいないのですよ！ ああ、もう、私には心を許せるお友達はいないのかしら。昔なじみの懐かしいルイズ・フランソワーズ、貴女にまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、私死んでしまっわ！」

芝居掛かった言い方だったが、姫君の必死の訴えかけに、ルイズはようやく顔を上げた。

「姫殿下……」

「幼い頃、一緒になって宮廷の中庭で蝶を追いかけたじゃないの！ 泥だらけになって！」

はにかんだ顔で、ルイズは応えた。

「……ええ、お召し物を汚してしまって、侍従のラ・ポルト様に叱られました」

「そうよ！ そうよルイズ！ ふわふわのクリーム菓子を取り合つて、掴み合いになったこともあるわ！ ああ、喧嘩になると、いつも私が負かされたわね。あなたに髪の毛をつかまれて、よく泣いたものよ」

「いえ、姫様が勝利をお収めになったことも、一度ならずございました」

「思い出したわ！ 私達がほら、アミアンの包囲戦と呼んでいるあの一戦よ！」

「姫様の寝室で、ドレスを奪い合った時のことですね」

「そうよ、『宮廷ごっこ』の最中、どっちがお姫様の役をやるかで揉めて取っ組み合いになったわね！ 私の一発が上手い具合にルイズ・フランソワーズ、貴女のお腹に決まって」

「姫様の御前で私、気絶いたしました」

それから二人は見つめ合い、そしてあはははと朗らかに笑った。笑い方といい、話の内容といい、おしとやかと言う範疇からは掛け離れたものである。

「その調子よ。ルイズ。ああいやだ、懐かしくて、私、涙が出てしまっわ」

心から笑って目元を拭う姫君は、それは美しかった。

嬉しそうに見守るジェラルルにとっては、王族の気品という義務に縛られたしとやかさより、年相応の娘らしく元気で明るく舞うの方が、眩しく貴いものに思える。

一しきり語り合って腹の底から笑ったルイズは、いつも以上にすっきりした表情でジェラルルの方を向いた。

「ジェラルル様。こちらのアンリエッタ姫殿下とは、ご幼少のみぎりに恐れ多くもお遊び相手を務めさせていただいていたんです」

懐かしそうに言うルイズに、ジェラルルは笑顔で頷いてから、賓客へと挨拶した。

「そうでしたか。お初にお目に掛かります、アンリエッタ姫殿下。私はジェラルル・ジャン・バティスト・デュードネと申します。ルイズの個人教師兼護衛役を務めております」

ルイズ同様慣れた風に膝をつくジェラルルに、アンリエッタは初対面ということもあって王族の体裁を取り戻した。

「まあ、そうでしたの。私、てっきりルイズの恋人かと」

真顔の王女の言葉に、ルイズはぼつと赤面し、焦り出す。

「ち、違います！ 私達、そんな関係じゃ、まだ」

「あら、まだということは、ただの教師と生徒の関係なのね」

「うっ、そ、そうですわ」

故意ではないにせよ、憧れの人の前で、幼馴染の主君にいじられたルイズは、穴があつたら入りたい気分になつてしまふ。自分は何も後ろめたいことは無い筈なのに、なんでこんないたたまれない気分になるのだろう、と彼女は人生に対して理不尽さを感じながらも必死に堪えていた。

流れを変えたいルイズは、話の種をすぐに思い付くと、アンリエツタに向き直つて言った。

「それにしても、姫様がそんな昔のことを覚えていてくださつたなんて、感激していますわ。私のことなど、とっくにお忘れになつたかと思つていました」

王女の顔から明るい色が消えた。深い溜息を一つ吐き出すと、彼女はルイズのベッドに腰掛けて述べた。

「忘れるわけじゃない。あの頃は、毎日が楽しかったわ。何にも悩みなんか無くって」

王女の口から出てきたのは、深い憂いを帯びた言葉だった。

「姫様？」

ルイズが心配そうに、アンリエツタの顔を覗き込む。

「貴女が羨ましいわ。自由って素敵ね。ルイズ・フランソワーズ」

「何をおっしゃいます。貴女はお姫様じゃない」

「王国に生まれた姫なんて、籠に買われた鳥も同然。飼い主の機嫌一つで、あっちに行ったり、こっちに行ったり……」

アンリエッタは、窓の外に浮かぶ月を眺めて、寂しそうに言った。それからルイズの手を取って、先とは全く異なる温度でにっこりと笑う。

「結婚するのよ。私」

「……おめでとございます」

アンリエッタの声に、悲しいものをルイズも感じたのか、沈んだ声の返事だった。

「姫様、どうかなさったんですか？」

「いえ、何でもないわ。ごめんなさいね……、嫌だわ、自分が恥ずかしいわ。貴女に話せるようなことじゃないのに……、私ってば……」

そう言われると、ルイズが気にならない筈はなかった。彼女にとって、アンリエッタとは、敬愛する主君であるのみならず、ほとんど唯一と言ってもいい同年代の友人でもあった。二重の意味で、かけがえの無い大事な存在であり、悩んだり悲しそうにしていたら、全力で助けてあげたい人なのである。

「おっしゃってください。あんなに明るかった姫様が、そんな風に溜息を吐くってことは、何かとんでもないお悩みがおりなのでしょっつ？」

「……いえ、話せません。悩みがあると言ったことは忘れてちょうだい。ルイズ」

ふるふると首を横に振って、言わなかったことにしようとする王女に、ルイズは強く言う。

「いけません！ 昔は何でも話し合ったじゃございませんか！ 私をお友達と呼んでくださったのは姫様です。そのお友達に、悩みを話せないのですか？」

逃がさないとばかりに見つめてくるルイズに、アンリエッタ王女は嬉しそうに微笑んだ。

「私をお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とても嬉しいわ。……今から話すことは、誰にも話してはいけません」

王女は、ジェラルルの方をちらりと見た。

「私は席を外した方がよろしいでしょうか？」

普通に気を利かせるジェラルル。しかし、ルイズがアンリエッタの目を覗き込んで発言した。

「姫様。ジェラルル様は、遙か東方の国の王族で、私が使い魔召喚の儀式で呼びだした方なんです。とてもお強いメイジで、私をいつも助けてくださる、親切で信頼できる方です」

一部の事実を改変してなされた咄嗟の説明に、姫君は目を丸くしてしまふ。

「人間を使い魔に？ 聞いたことがありませんわ」

「正確には、まだ使い魔になってもらってないのです。私が未熟者



なので、お眼鏡に適うほど成長したら契約してもらおうということなのです」

使い魔に契約してもらうために、生徒としてそれに師事するメイジ。前代未聞の話に、アンリエッタは白磁の頬に人差し指を当てて、軽く首を傾げる。

「貴女って、昔から変わったところがあったけれど、今の話とはびきりだわ。歴史書に残り得るほどの珍しいお話ね」

「……はあ」

「でも、事情は分かりました。ルイズの信頼する先生で、常に側にある方とあれば、一緒に聞いてもらうべきでしょう」

そして、物悲しい様子で、アンリエッタ王女は語り出した。

「私は、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになったのですが……」

「ゲルマニアですって！」

ゲルマニアが嫌いなルイズは、驚きの声を上げる。

「あんな野蛮な成り上がりどもの国に！」

「そうよ。でも、仕方が無いの。同盟を結ぶためなのですから」

アンリエッタは、現在のハルケギニアの政治情勢を説明した。

「現在、アルビオンでは貴族達が王室に対して反乱を起こしているのです。その兵力差は圧倒的で、もう戦の勝敗は決定したに等しいのです。反乱軍は、ハルケギニアから王権力を消滅させ、統一させるなどという暴挙を企んでいると聞きます。ですから、その反乱軍はアルビオン王室を倒したのならば、すぐにでも我々トリステイン

王国に侵攻して来るでしょう。それに対し、トリステインが独力だけで対抗するには国力が大きく不足しています。だから、ゲルマニアと同盟を結びそれに対抗することが決まったのです。そして、ゲルマニアが同盟を結ぶ条件として提示してきたのは、私との婚姻なのです」

「そうだったんですか……」

現在の世界がおかれている重苦しい現実、そして親友の明らかに望まぬ縁談に、ルイズの声も沈んでしまった。

「いいのよ、ルイズ。好きな相手との結婚なんて、物心がついた時から諦めていますわ」

「姫様……」

「礼儀知らずのアルビオンの貴族達は、トリステインとゲルマニアの同盟を望んでいません。二本の矢も、束ねずに一本ずつなら楽に折れますからね」

アンリエッタは呟いた。

「従って、私の婚姻を妨げるための材料を、血眼になって探しています」

「もし、そのようなものが見つかったら……まさか、姫様の婚姻を妨げるような材料が？」

ルイズが顔を蒼白にして尋ねると、アンリエッタは悲しそうに頷いた。

「おお、始祖ブリミルよ……、この不幸な姫をお救いください……」

自らを不幸と称する姫君は、顔を両手で覆うと、床に崩れ落ちた。

「言つて！ 姫様！ 一体、姫様のご婚姻を妨げる材料つて何なのですか？」

ルイズも大仰な姫君につられたのか、興奮した様子でまくしたてる。両手で顔を覆つたまま、アンリエッタは苦しそくに呟いた。

「……私が以前したためた一通の手紙なのです」「手紙？」

「そうです。それがアルビオンの貴族達の手に渡つたら……、彼等はすぐにゲルマニアの皇室にそれを届けるでしょう」

「どんな内容の手紙なんですか？」

数秒押し黙つて、王女は重い口を再び開く。

「……それは言えません。でも、それを読んだら、ゲルマニアの皇室は……、この私を許さないでしょう。ああ、婚姻は潰れ、トリステインとの同盟は反故。となると、トリステインは一国にてあの強力なアルビオンに立ち向かわなければならぬでしょうね」

ルイズは息急ぎ切つて、アンリエッタ王女の手を握り締める。

「一体、その手紙はどこにあるのですか？ トリステインに危機をもたらす、その手紙とやらは！」

ルイズは興奮した声を上げながら王女に問うたが、彼女は力無く首を振つて答える。

「それが、手元にはないのです。実はアルビオンにあるのです」

「アルビオンですって！？ では、既に敵の手中に！？」

「いえ……、その手紙を持っているのは、アルビオンの反乱勢ではありません。反乱勢と骨肉の争いを繰り広げている、王家のウェールズ皇太子が……」

「プリンス・オブ・ウェールズ？ あの、凜々しき王子様が？」

アンリエッタはのぞけると、ベッドに体を横たえて声を震わせた。

「ああ！ 破滅です！ ウェールズ皇太子は、遅かれ早かれ、反乱勢に囚われてしまうわ！ そうしたら、あの手紙も明るみに出てしまっ！ そうなったら破滅です！ 破滅なのですわ！ 同盟ならずして、トリステインは一国でアルビオンと対峙せねばならなくなります！」

ルイズは息を飲んで聞いた。

「では、姫様が私に頼みたいというのは……」

「無理よ！ 無理よルイズ！ 私ったら、なんてことでしょう！ 混乱しているんだわ！ 考えてみれば、貴族と王党派が争いを繰り広げているアルビオンに赴くなんて危険なこと、頼めるわけがありませんわ！」

ジエラールは、表向きは眉一つ動かすことなく聞いていたが、心中では警戒を大いに強めていた。ほんの数分前までの平穏な生活が、突然危険地帯へ放り込まれて粉々に碎かれるかも知れない。そのことを危惧し、今後のことを考えようとしたその時、もう一人の少女が堂々と小さな胸を張って宣言したのだった。

「何をおっしゃいます！ たとえ地獄の釜の中だろうが、竜の顎あごの中だろうが、姫様の御為とあらば、いずこなりとも向かいますわ！ 姫様とトリステインの危機を、このラ・ヴァリエール公爵家の三

女、ルイズ・フランソワーズ、見過ごすわけには参りません！ この私めに、その一件、是非ともお任せくださいますよう」

ジェラルルが予想していた中で、最も恐れていた展開へと傾いていきそうな発言であった。彼は間髪入れずにルイズに問う。

「ルイズ。そんな簡単に請け合えることですか？ 良く考えたのですか？」

自分の教え子でもある少女が、国と主君のためとは言え、二つ返事で危地へ赴くことを了承すると言うのだ。ジェラルルは、勢い任せの軽率、短慮ではないかと危惧せずにはいらなかった。

「考えるまでもありません！ 幾千年に渡りトリスティン王家に大恩給わるヴァリエール公爵家の娘が、国の一大事にどうして尻込みできません！？ 非才非力の私ですが、行かないわけには参りません。ましてや、姫様は私の大事なお友達でもあらせられるんですもの」

ルイズの目は真剣で力強い。一片の迷いも無き者が持つ美しさがある。若いながらも、使命に殉ずることに恐れが見受けられない輝きが、くりつとした鳶色の双眸に漲っている。

若くて精気に溢れ純粹。それ故、同時に危うさも抱えるものだということは、同じ目をして散っていった若い兵士達を何百人と見たジェラルルは、痛いほど知っていた。その目をした者を止める術がほとんど無いことも。

止めようが無いのなら、自分がついて行って守るしかない。相手の戦力は詳しく知らぬが、人間の精鋭数千人にも匹敵する七英雄を倒した己なれば、相応の自信はある。

ただし、その前に確認しておかねばならぬことがあった。

「アンリエッタ姫殿下、是非お聞かせ願いたいことがございます」  
「何でしょうか？」

ジェラルルは、いかなる者も包み込んで逃さない、その深い色の瞳で姫君を見据えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8372s/>

---

ロマンス・オブ・ルイズ

2011年6月11日17時22分発行